

# フロイディズム研究（その1）

岸 本 弘

## 目 次

1. はじめに .....	( 1 )
2. 催眠術について .....	( 2 )
3. 感情転移愛現象 .....	( 4 )
4. 抑圧と抵抗の学説としての精神分析学 .....	( 7 )
5. 無意識の過程 .....	( 9 )
6. 小児性愛とエディプス・コンプレックス .....	( 11 )
7. 無意識の証拠 .....	( 22 )
① 夢 学 説 .....	( 23 )
② 失錯行為の解明 .....	( 32 )
③ 症候行為 .....	( 38 )
8. 意識と無意識 .....	( 41 )

# フロイディズム研究 (その 1)

岸 本 弘

## 1. は じ め に

精神分析学の創始者、ジグムンド・フロイト (Sigmund Freud) の現代科学への最大の貢献は、もうすまでもなく、無意識の発見とその解明にあるといえよう。すなわち、彼は精神病医としてノイローゼ症状の観察から出発し、これを解明することによって、無意識的な心的葛藤の故に人間が病気になることを見つけた。そして、この心的メカニズムを夢や日常生活のささいな失錯行為の解釈にも適用することによって、人間の心的行為には無意識的な心的過程を想定しなければ、どうにも説明がつかないことがあまりに多過ぎることに気がついた。しかもこの無意識的なものは、どうでもよいとうちすてられてよいようなものではなく、人間の生活に少からず重要な影響を与えるものなのである (他ならぬ人間はこの故にノイローゼになるのである)。こうしてフロイトは無意識の仮定が人間心理の解明に不可欠の要素であることを、確信をもって唱道することになったのである。

ところでフロイト以前の心理学では、人間の精神生活とはすなわち意識的な過程であると、心理と意識とを同一視し、いやしくも万物の霊長たる人間の正常な精神生活に、本人にも解らないような「無意識的な心情」などというおかしいものがあるなどとは考えてみることもできないとされていたものである。とはいっても、このことはそれ以前の人間の生活に、意識心理学では説明のつかない行為や心情が全く存在しなかったということを意味しているのではむろんない。フロイトが無意識の過程を想定せざるをえない直接のきっかけとなった、催眠術は遠い昔から存在していたし、彼が無意識心理学を展開する不可欠の条件となった夢現象や失錯行為などというものも、人類の歴史がはじまったその当初から恐らくは存在しつづけてきたにちがいないのである。したがって人間の心的生活に意識的過程のみならず、これとは異質の過程すなわち無意識的ともいうべきものがあるらしいことをほのめかした最初の人が、フロイトであったというのではない。彼の歴史上の意義は、むしろこれら意識不明であるが故になおざりにされ、まじめにとりあつかわれなかったものに、説明のいとぐちをつけ、ノイローゼ治療にある程度の成功を治めたこととあいまって、裏街道でひそやかにささやかれつづけてきたものを学問の表街道におしあげ、心理学上のまじめな攻究の対象たらしめた点にあるといえよう。したがってそれはまた既定の象牙の塔に安住し、自惚れの中で自説にあくまでも固執することに意義を見つけがちなアカデミックな世界から、それだけ大きな非難の矢面にたたされなければならなかったことを意味していた。これが彼の生涯が彼のいうように四面楚歌の中で、独りかいた反抗の弓をひくに似たものとならなければならなかった大半の理由であったといえよう。

ともあれ現在われわれの日常生活をふりかえてみると、「その時の私の行為は無意識的であ

った」とか「その時私は無意識のうちにそうしていた」とかいうように、無意識行為の想定はもはや日常茶飯のこととなっている。一方学問の世界をみても現代の心理学者の中で、この無意識的な心的過程に最も同情をよせていないといわれる<sup>(1)</sup>、オルポート(G.W. Allport)やレヴィン(K. Lewin)<sup>(2)</sup>にしても、結局はこれを認めざるをえないのであり、しかもこのような現象が、フロイトが無意識の唱道をはじめてからたかだか5, 60年という短期間に実現したことを思えば、フロイトの歴史上の意味はおのづから明らかとなろう。このように考えてくるとアメリカの著名な心理学者トルマン(E.C. Tolman)が20世紀前半に活躍した心理学者の中で後世に残る特筆すべき心理学者の名をあげるとすれば、何のためらいもなくフロイトとレヴィンの名をあげるといったのも、(レヴィンはさておき)ある意味では、全く当をえた処置であったということができると思う。

以下は、フロイトの学説のユニークな点について、まず考察しようとするものである。

## 2. 催眠術について

フロイトは前述のようにはじめ人間の心の研究家、つまり心理学者として世にでたのではなく、精神病の臨床医として出発したのであった。そしてこのことが、彼の心についての学説を、ユニークなものにしたてあげた決定的な要因となっている。それは何よりも、彼が催眠術と関係する運命にあったことによるといえよう。

フロイトがノイローゼ治療にタッチした頃には、既にパリでは、精神科医が長い間まやかし的なものとしてまじめな層から危険視もされてきた、催眠術を何のためらいもなく患者に施し、ノイローゼの症状をつくりだしたり、消失したりする方法として採用していたのである。そしてより決定的な点は後にフロイトのよき協力者ともなり、よき友人ともなることによって、フロイトに重大な影響を与えることになった、ブロイエル(J. Breuer)博士が、既にこの催眠術をキバンにヒステリー患者の治療にある程度のみるべき成功をおさめてもいたことである。フロイトはこれらの事実を見るにつけ、また自分でも次第に経験を積むにつれ、催眠現象とは実在するものであり、決して世に信じられているような詐術的なものではなく、真実性を持った心的過程であることを強く感じないわけにはいかなかった。まして他ならぬブロイエル博士はこれによって、ヒステリー治療にかけない程の成功をおさめてもいたのである。精神病治療を生涯の仕事に選び、それによって生計をたてようと決心していた、フロイトにとっては当然このブロイエル博士の成功は限りない価値をもっているものに思われた。が、しかし博士は何故かこの優れた業績を公表しようとはせず、この認識によって学問の世界を豊かにしようとはしないのであった。その博士も、ついにフロイトのしつようなすすめにまけて、やがてフロイトと共著という形でその業績を公表することになる。が、公表するやいなや予期していたようにアカデミックな世界から総反撃をくらい、驚いてしまったブロイエル博士は頭をかかえて急ぎこの世界から退散してしまうことになってしまったのである。つまり催眠現象こそは意識心理学では説明がつかないが故に、学問の世界からはしめだされていた主要なものの一つであったし、その故にまた詐術的なものとして危険視もされてきたものであった。したがってこれを認め、その積極的な効用を揚言することは、すなわちアカデミックな世界に好んで

弓をひく一匹狼の立場を自からかってでるようなことを意味していたのである。

ブロイエル以前にも、催眠術は患者を夢遊の状態におとしいれ、暗示をかけたり命令したりすることによってノイローゼ症状をとり除く方法として採用されていた。そして確かにそれもある程度の効果をあらわしてはいた。しかしそれは何時も長続きせず、すぐ再発してしまうのであったから、それ故にこそまた詐術的でまやかしのものとみなされ、危険視もされ、学問の表街道からは閉めだされてきたものであった。したがってこの頃までの催眠術は、患者に対する治療効果よりもむしろ奇蹟のようなことをする人との噂によって、これをひそかに用いる医者の方の名誉欲を満足させるのに卓効を示していたというべきだったかもしれない。フロイト自身、その噂の主となることは決して悪いものではなかったと告白している<sup>(3)</sup>。

とはいうものの、催眠術のみが当時としてはノイローゼというこの奇妙な病気の治療に、ある程度関係を持ちうる唯一のものであった。そしてフロイトは当時誰でもが誰に対しても自由自在に思い通りの深さの催眠状態に入れることができないという欠陥を、催眠術が持つ本質的な欠陥とは知らなかった。そのため自分の手がけた患者がすぐに再発するという現象を彼の修行のたりない、つまり彼の催眠技術の未熟さの故に、患者を健忘をとまなう夢遊の状態にまで達しさせることができないせいだと考え、催眠術の技術をみがくことに没頭していったのもまた当然のなりゆきだったともいえる。しかしそれはかいなき努力にも似ていて、誰がやっても催眠療法によるかぎり、患者はたとえよくなっても直ぐにまた再発するはずのものであった。このいわば袋小路の中にあったフロイトに新しい探求のきっかけと方向を与えてくれたのが、他ならぬ前述のブロイエル博士の発見だったのである。この14才年上の短い間ではあったが彼のよき協力者となった、医師の独創的な発見は、全く偶然の観察からえられたものであるといわれる。彼はあるヒステリー患者を深い催眠状態に導き、その都度何が患者の気分を苦しめているかを患者自身に語るようにさせた。すると患者はめざめている時には、その症状がどうして発生したか、その症状と過去における何らかの印象とを結びつける、何かを全く探しだすことはできなかったが、催眠中には不思議なことに求めている連関をすぐに発見し、指摘するのであった。こうして彼はヒステリー症状は、すべて患者自身の生涯に起った、過去の印象深い体験に帰することができ、したがってすべて意味があるのであり、過去の感動的な情景の残滓であり、忘れがたみであることを見つけた。つまり症状とは患者にとってこの過去の重要な情景において圧迫され、おさえつけられねばならなかったある考え、ある衝動なりの代りに、その代理として後にあらわれたものであることを見つけたしたのである。したがって患者を催眠状態に落とし入れ、その情景を幻覚的に回想させ、その感動にみちた空想に対して言語的な表現を与えるようにさせる。つまり当時おさえつけられた心的行為に対して、後になってではあるが自由に発散させることで結末をつけてしまうやいなや、症状は消しきられてしまい、二度とあらわれることはないのであった。これは書く程に容易な仕事ではなく、苦勞の多い仕事であったが、その治療にあたって企図するところは、次のようなものと考えられた。すなわち本来ならば自由に発散されてしかるべきであったある考えなり、衝動なりが、何らかの事情で圧迫され、発散されなかったために、まちがった路線にふみこんでしまった。つまりそこにひっかかり動けない

ままになっている過去の感動興奮のエネルギー総量が、他ならぬ症状を形成し、今なお保持させているものである。したがって患者を夢遊の状態にみちびくことによって、その過去の情景にたちもどらせ、発散されなかったその時の感動興奮の総量を言葉にする（意識化する）ことによって、正しい道を通して発散させることができれば、当然原因となっているものがなくなってしまうのであるから、症状も解消させてしまうことができるというのであった。これがブロイエルはいわゆるカタルシス技法（通利法）とよばれるものの実態であったが、これは、ノイローゼの治療過程についての観察を直接に表現した程度のもので、ヒステリーの本態を解明しようとしたものでもなく、ただその症状の成立を明らかにしようとしたものにすぎなかった。が、その効果はすぐれたもので、今日においてもこのブロイエルの方法のままにとどまっているノイローゼの心理療法がある程であり、フロイトも精神分析はこのブロイエルの功績の基盤の上に発展させられたものにすぎない、という意味のことを、その著作のなかでくりかえしくりかえしのべている<sup>(4)</sup>。

ところでブロイエル博士がこれ程重大な発見に直面しながら、これを更におしすすめていくことをしようとはせず、アカデミックな世界から一ぱつくらわされるやいなや、急ぎ退散せねばならなかったのには、むろんいろいろな事情があつたことだったろう。しかしその最も大きな理由は、やはり前述のように催眠術が詐術的な要素をふくんだ危険なものとして学問の世界からしめだされていた、いわばいわくつきのものであったことからきていたとみるべきだろう。彼が夢遊の状態を正常な心理過程とはちがった異常な過程と考え、したがってまたノイローゼ症状形成の心的過程が、根本的には生理的原因からきていると考えざるをえない方向へと次第に傾斜していかざるをえなかったのも、アカデミックな世界からの無言の圧力がそれだけ大きかったことを意味していたものとみるべきだろう。まして既にまっとうな医学の世界で相当の業績をあげ、ヴィーンにおいても最も尊敬される家庭医の一人に数えられるという程の地歩を築きあげていたブロイエル博士である。何も今更、つまらない考えを何時までも持ちつづけることによって、自己の評判をおとし、今までの業績を帳消しにしてしまう必要は少しもなかったといえる。その時運悪く彼がカタルシス技法によって治療に成功をおさめていた女患者に突然感情転移愛の状態が起つたのである。それが彼女の病気になることと関係があり、他ならぬ催眠術がその故にこそ成立しているものであることを知らなかったブロイエル博士は、驚いてしまい、カタルシスそのものから急ぎ退散し、生涯二度とこの世界にはかえってくることはなかったという結果になってしまったのである。

### 3. 感情転移愛現象

「ノイローゼの治療戦線において新しい発展が始つたのは、」前述のような事情から「ブロイエル博士が二人の協同の仕事から退いてからであった<sup>(5)</sup>」とフロイトはのべている。そしてその発展のきっかけも、やはりブロイエルがこの仕事から身をひく最後のきっかけとなった感情転移愛現象によって、今度はフロイト自身がてびたい打撃を蒙ることによってでなければならなかった。あるときフロイトが 患者のひとりを催眠状態におとし入れ、カタルシスによってその苦悩から解放してやったときのこと、覚醒するやいなや彼女は腕を彼の首にまきつけてきて彼を驚かせたので

あった。彼はこの予期せぬ事件に直面し、その原因が彼自身に人をひきつけずにはおかない魅力があるためだと自惚れぬだけの謙虚さは持ちあわせていたので、「これこそが催眠療法の背後にあって働いている神秘的要素の本性であると思わないわけにはいかなかった<sup>(6)</sup>」と後になって述懐している。つまりブロイエルの発見したカタルシス技法はすぐれた方法であり、「この方法を知ってからはもはやこれ以外には何もしなかった<sup>(7)</sup>」とフロイトにいわしめる程ノイローゼ治療に卓効を示した。が、しかしこの方法による成績も治療者の患者に対する人としての関係がくもってくると急に拭いさられでもしたかのように、その効果は失われてしまうのであった。そして再びそれをつぐなうような関係をよびもどささえすれば、その効果をも再びとりもどすことができるのであった。したがってカタルシス技法においても、カタルシス自身の仕事よりも、治療者と患者との間にできあがるこの個人的な感情関係の方が主体となって働き、カタルシス技法そのものを効果的な方法たらしめている核そのものであると思わないわけにはいかない。つまりこの個人的感情関係こそが催眠術をもカタルシスをも成立させているものであった。催眠術者（治療者）は患者に過去において彼（もしくは彼女）がある人に抱いた強烈な個人的感情関係を、自己に転移させることによって患者を類催眠状態に落し入れもし、患者の意識野をひろげ、覚醒している時にはどうにもできない知識を意識にのぼせることによって、カタルシス技法をも成立させていたのである。女患者が思いもかけず類催眠状態から醒めるやいなや彼の首に腕をまきつけてきてフロイトを驚かせたのも、彼女が過去に抱いたある人（多くは父親であることは後に解明された）に対する強烈な愛情の痕跡を、催眠術をかけたフロイトに転移させることによって示した正直な愛情表現にすぎないのであった。しかもその過去の強烈な感情関係こそが病気の原因になっていることは、カタルシス技法からしても疑いをいれない。フロイトはこの思いもかけぬアクシデントを、その瞬間偶然その部屋に入ってきた彼の使用人という第三者の介入によって、後になってからお互いに苦痛となるような議論をすることなしにすまず幸運にめぐまれ、からくも紳士としての体面を保つことができたといわれる<sup>(8)</sup>。が、しかしカタルシスの技法を用いるかぎりこのような危険な場面に遭遇することは常に覚悟していなければならないことになる。すなわち紳士たる医者としての体面を保持しようとするかぎり、催眠術のもつこの危険な要素をとり除くか、少なくともきりはなすかしないかぎり、もはやカタルシス技法そのものをもこれ以上つづけるわけにはいかなかったのである。

とはいうものの催眠術こそが治療を成立させている基盤そのものであった。催眠術の魔力による以外に患者の意識野をひろげ、めざめている時には意識にないものを意識にのぼせるなどというのはなれわざを可能にするものがありえようか。フロイト自身「これに代りうるものをみつけたことは容易ではなかった<sup>(9)</sup>」と告白している。それにしても催眠状態においてのみ、めざめている時には本人にすら予想もできない過去の体験をわがものとし、これについてやすやすと語りうるのか。しかも催眠状態からめざめるやいなや、その間に起ったことについては何ひとつ覚えていないといい、実際に記憶は失われているようにみえ、忘れさってしまうことができるのはなぜなのか。そこには当然何らかの事情が介在してしかるべきである。フロイトはここでかってバりに遊んだ時、精神病理学者ベルネイム（もしくはベルンハイム Bernheim）の下でみた実験と彼の言葉を思いだ

した。ベルネイムはその時フロイトに次のようにいったのである。「患者は夢遊の状態からめざめた時には、その間に起ったことについては、きまってる覚えていないといひはり、また実際にも記憶は患者から失われているようにみえるが、実は全部知っているのである<sup>(10)</sup>」と。そしてベルネイムは実際にその事実を彼の前で実証してみせたのであった。治療者の方で思ひださなければならないと要求し、患者の方でも自分は全部知っているのだ、それをただいいさえすればよいのだと誓ひ、その際更に治療者が患者の額の上に手をおくなどの補助手段を加えて巧みに誘導してやると、はじめはごくためらいがちにであるが、今は忘れられていたと思われていたものが、思い出の糸をたぐりよせるように次第によみがえってき、やがては流れるように、しかもはっきり浮びでてくるのであった。しかもその際意識にのぼってくるものは、きまってる患者の遠い過去の生涯に起った体験にもとづくものなのであった。フロイトは摸索しつづけた後に、このベルネイムの方法にならってやってみることにした。催眠術を廢止し、ただ静かにベッドの上に横臥させるという点だけを残しておき、ベッドの後方に彼が坐り、彼の方では患者をみることはできるが、患者の方からはみられないようにし——この彼のとった独特の方式の故に（フロイトが人に見つめられることを恐れて、寝ている患者の枕許に常に坐ったこと）フロイトがかなり臆病であったとなえる人がいる<sup>(11)</sup>——とにかく感情転移愛による前述の女性とのアクシデントは彼にとってかなりてびたい打撃であったことは確かである——手を額におくなどの補助手段にも助けられながら、知っているはずだと保証したり、力づけてやったり、思ひださねばならぬと促したり、強制したりする手法を用いることによって、今までは催眠術のみがやりとげうると信じられていたものを、これを用いないでもやりとげうことを知ったのである。後にはこの強制したり、保証したりする方法は、「治療上のエネルギーの節約の考慮および患者の回想に対するより本質的な障害をとり除くためにも、<sup>(12)</sup>」むしろある意味ではこれとは正反対の患者にある特定のテーマについて語るように強制するかわりに、自由な連想のおもむくままに語れと要求する、フロイトのいわゆる自由連想法へと発展していくことになった。が、いずれにしてもこの場合、治療者は患者にそうしむけるというわけではないのに、治療者との実際の関係の中ではとうてい説明のできないような強い感情的関係が患者に生じてくる。それはある時は陽性（positive）の時もあり、時には陰性（negative）の性質の時もあり、情熱的で全く官能的な恋著から、反抗、怒り、および憎悪というような極端な表現をすべきものにいたるまでの変化を示してあらわれる。いわゆるこの感情転移現象こそは、過去の強い愛著体験——後には抑圧された幼児期に由来する感情関係を再体験するということが解明されるに至ったが——を治療者に移すことによって再体験するものであり、他ならぬ催眠術をも成立させえていた被暗示性の基盤であり、したがってまたカタルシス技法をも効果的な方法たらしめていたものである。そしてより肝腎なことは、それこそがノイローゼ症状を形成しているものに重大な関係ありとすれば、それをさけて通ろうとすることは意味のないことであるばかりでなく、治療そのものを不可能なものとしってしまうであろう。しかも人間はみな過去に強い感情体験をともなう幼児期を経験してくるものとすれば、この感情転移現象こそは人間一般に見られる現象であるといわねばならぬ。ただノイローゼ治療に際しては、催眠現象に典型的にみられるこの暗示性とか感情転移現象を媒介として利用す



るだけである。病気の原因ともなっている感情体験をあらわにし、孤立化させ、患者に意識化させることによって克服解消させることを目的としているということができる。したがってフロイトもいっているように、この種の感情の転移の傾性がなんらかの事情でなくなって欠けているか、全く陰性であるような、たとえば早発性痴呆およびパラノイア（paranoia）のような患者の場合には、医者（治療者）も心的な影響を与えることはできず、心理療法は本質的に不可能ということになってしまうことは当然のなりゆきなのである。

#### 4. 抑圧と抵抗の学説としての精神分析学

ところで患者が過去における外界の経験や心内の経験の事実の中で、それほど多くのものを忘れ、覚えていないというのは何によるのであろうか。しかもそれらの忘れられた事実が、上記のような技法——催眠術やフロイト（あるいはベルネーム）の技法——を用いるときまって思いだされるのは何によるのであろうか。これについてはまだ何も答えられてはいない。しかもこれらの技法によって思いださせることができさえすればそれによって病気がなおってしまうのである。病気とひきかえにしなければならない程に、今なお忘れていなければならない理由とはどんなものなのであろうか。

この間に対して、はっきりした解答を与えてくれたものは観察であった、とフロイトは告白している<sup>(13)</sup>。たとえばフロイトの技法を用いれば患者は思いだしはするが、決してその過程はなまやさしいものではなかった。双方にとってかなりの労苦を要することであった。知っているはずだ、思いだせると患者に保証してやったり、力づけてやらねばならず、手を患者の額において励まし促してやる必要であった。またそればかりではなく患者自身の方でも思いだせるはずだ、知っているのと再三再四誓わねばならず、忘れていた事実を意識の方におしやることは、とにかくかなりの時日と労苦を要することであった。しかもそうした方法を取りさえすればきまって思いだすのであったから、何かが今はそれらの事を意識におしやることを妨げており、今は忘れていたことをよし、好都合としているのだと考えざるをえない。しかも病気とひきかえにしなければならない程に。

病気とひきかえにしなければならない程に、それらの経験を忘れていなければならない理由とは何か。フロイトは臨床経験の観察から、至極簡単な答をひきだすことができた。そのありようは次のようなものであった。患者が過去において遭遇したある情景において、まさに意識に浮びあがり、認知されようとしたある考えなり、ある衝動なりを意識にのぼしてしまうことは、彼を破滅させてしまう。それ程に苦痛で恐ろしい、或ははづかしいことだったのだ。それでこそ急いで意識にのぼるまえに遮断することによって結末をつけてしまう必要があったのである。つまりそれを認知してしまうことは、彼の人格の存在そのものをおびやかす程に恐ろしい苦痛なことに感じられたから、（事実それを意識したところで本当に破滅するか、どうかは別問題である。大切なことはその時の彼或は彼女にはそのように感じられたということである）自己を守り通すために急ぎ意識からおい退けねばならなかったというのである。いってみれば自己を破綻させてしまう程に恐ろしい感動興奮に直面しそうになったので、その危険からのがれるためにいち早く背をむけてしまった。したが

ってそれについて今は何も知らないというわけである。フロイトはこの自己の人格を破綻させてしまふやも知れぬ程に患者を瞬間的にとらえた感動興奮を、患者が急いでむりやりに意識からおい退けてしまう作用のことを抑圧の作用と名づけた。そしてそのさいむりやりに急ぎ意識からおいやられた——すなわち意識されたり、直接的な運動として現われる通路をふさがれた、つまり抑圧された——ある考えなり、衝動なりに、その時与えられた感動量（エネルギー）は消えてなくなってしまうのではなく、そのまま保持されるのであり、折あらば意識にのぼろうと機会をうかがいつづけるものなのである。したがって逆にたえずこれを意識にのぼすまいとする妨害の作用が働きつづけているのでなければ、抑圧の目的は完遂されることはできなくなる。この働きこそが今もなおその時のことを思いださせない力となっているものであり、それを意識にのぼすには患者の中で反抗しているこの働き（フロイトはこの作用のことを抵抗と名づけた）にうちかつことが必要だったし、彼を追いつめ、やむをえずそうするようにさせるには治療者の方にもかなりの努力が必要とされるのであった。その治療者に要求される努力の量はそれぞれの症状、症例ごとにちがっており、当然回想するものの困難さの度合いに比例して大きくなるのであったから、治療者の消耗度はあきらかに患者の抵抗の尺度ともなっている。一方その故にまた本来ならば正常な道を通して発散されるべき道を妨げられたこの考えなり、衝動なりは、その後もたえずたとえまちがったまわり道を通してであれあくまでも発散されることを求めつづける。つまり代償充足としてののはけ口をどこか弱い部分（さいわいこの場合には抵抗のためにかなりのエネルギーがたえず消耗されているから、他の部分に費消されるエネルギー量はそれだけ少くなることになり、エネルギーのバランスはそれだけくずれやすくなっている）に見つけたして、妨害者の意図を空しいものとしようとしてたかいつづけるのである。こうして破綻したものこそがノイローゼ症状であって、症状こそは正常な発散を妨げられたものの、あくまでも発散を妨害しようとするものに対するささやかな復讐の試みとも、またその企画に対する嘲笑ともみることができるといふことにもなる。

したがって症状を解消するためには、症状形成の原因となっている、正常な発散を妨げられた——すなわち意識されたり、直接的な運動としあらわれる通路をふさがれたある考えなり、衝動を意識にのぼすことによって正常な発散を遂げさせることが必要になってくるわけである。そのためには、その抑圧された考えなり、衝動なりをのせていた過去の強烈な印象を今一度注意深く回想してみることが必要である。それには患者の心の中で回想することに反抗し、妨害している抵抗にうちかたせることが必要であり、一方患者を追いつめてやむをえずそうさせるためには、治療者の方にも大いに努力することが要求されると、こういうことになるわけである。カタルシスこそはこの抵抗の過程を催眠術の介入によってなきものにしていたのであり、患者はその過去における感動興奮情景の中で、中心的役割を果たした人物に抱いた感情を今は治療者に転移することによって、やすやすとその情景を回想することができる。そしてその時はあまりの恐怖と苦痛のために意識にまではのぼらなかった感動興奮を今は言葉にし、意識にのぼすことによって正しい通じをつけ、発散させることによって、症状をば解消させていたのであった。したがってこの技法においては、感情転移こそが治療の本質であり、フロイトの女患者が突然愛情の手をさしのべて驚かせたのもそれであ

り、この感情関係が強力に働いているかぎりにおいてこそ治療効果も持続させうるが、この関係がうとくなり、うせるやいなやまた逆戻りするという関係になっていたわけである。しかし今や治療にあたって企図するところは、まちがった路線にふみこんでしまって動けなくなっている感動興奮に、感情転移愛現象そのもののもとで（つまり催眠現象の中で）正しい通じをつけることによって発散させ、これによって反応を除くというカタルシス技法からは脱皮することになった。つまりこの事件のそもそもの原因となっている感情転移現象そのものの正体をあらわにし、孤立化させることによって、抑圧の正体をあらわにすることが中心課題となる。かつて意識から追いしりぞけられながら今も痕跡として残存し、他ならぬ症状として破綻している感動興奮を今一度再現し、意識の強力な関与のもとに正常な判断の作用によって承認すべきは承認し、否認すべきは否認するという過程で抑圧そのものを解消する過程となった。こうしてフロイトは、ノイローゼの症状形成のメカニズムを解明するとともに、その治療にも劃期的な技法をつくりだした。が、それはいってみればブロイエルとベルネイムの業績の折衷ともいうことができよう。それはともかく、フロイトはこの新しい事情を考慮にいれて、この「検査と治療の操作を<sup>(14)</sup>」もはやカタルシスとは呼ばず、精神分析と名づけたのである。そしてこれがいわゆる精神分析学の創始となった。

## 5. 無意識の過程

フロイトは前述のように、ノイローゼ症状は、患者がそれを意識すれば（その事実を認めれば、）自己の生存そのものがあやうくなってしまうと瞬間思いこんだが故に、急ぎ意識から追い退けた（つまり認めることを拒んだ）過去の感動興奮痕跡の後作用であることを知った。その際意識からおい退けられたものは、そのまま霧の如く消えさってしまうのではなく、意識されないままで痕跡を強く当人の心の中に残す。つまり与えられたエネルギー量は何時までも持ちつづけられるのである。そして平時においてはその意識されない、つまり無意識的なものの意識にあがろうとする浮力と、これに抗してそれをあげまいとして働く力（つまり抑圧、抵抗の作用）とは相拮抗してことなきをえているものなのだ。が、一朝事ある非常の時に直面すると、一人の人間に与えられているエネルギーの総量はきまっているのだから、平時ならば何処か他の部分に分配されていてよいはずのエネルギーまでが動員され、この非常事態に應接しなければならなくなろう。したがってその間はエネルギーが不足し、手うすとなる部分がどうしても生ずるはずである。このエネルギー量のアンバランスな非常時の現出によって、片時たりとも忘れず放出の機会をねらっていた、あの無意識的な感動興奮痕跡は、よき機会到来とばかりに、そのエネルギー配備の手うすとなっている、いわば弱い部分にむかって破綻し、目的を果そうとするのである。こうして破綻したものがノイローゼ症状だったわけである。したがってこれを解消するためには、今は症状として破綻しているものの元凶である、かつての感動興奮を今度は意識の関与のもとに回想し、反復体験させることによって発散させるより他はない。これがフロイトの認識した事情であった。つまり無意識的なものが病気の原因になっているのであるから、まずこれを意識にのぼさなければそれがどのようなものであるかも、われわれは知ることができない。この無意識的なものを意識におきかえる（翻訳する）ことが、

すなわち精神分析の仕事であって、これが治療の第一条件といってよい。そしてそれを可能にするためには、分析される者（患者）が自己の中で意識化させまいとして働いている抵抗の作用を、克服することがどうしても必要になってくるというわけである。しかも重要なことはその意識させまいとする抵抗の働きは、かつて意識にあらうとしたものを意識から閉めだし、無意識のままの状態にとどめた、すなわち抑圧した当のものから出ている働きだということである。なぜならば、抑圧されたもの、意識にあがることができず無意識にとどめられたものは、機会があれば意識にのぼることによってあくまでも自己の本来の目的を達しようとしているのであり、他ならぬ症状こそはこの抵抗の頑強の故に仕方なく廻り道を求めて破綻した代償充足なのであるから。一方抑圧の作用をなしたものは逆に、その意識にあらうとするものに対してはあくまでも、抵抗することによって、これまた自己の目的を完遂しつづけようとするにちがいない。ノイローゼの症状はこの二つの相反する意図の対立の結果なのであって、ノイローゼを単純に無意識的なものと意識的なものとの対立に帰するならば無限の混乱におちいるといわねばならぬ。つまり症状はかつて意識にあらうとして抑圧され、しかもこれにひるむことなくあくまでもその初志を完遂しようとする抑圧されたものと、他ならぬその抑圧を遂行し、これまたどこまでもその抑圧の目的を完遂しようとしてどこまでも抵抗しつづけているかつて抑圧したものととの対立の不幸な結果なのである。しかもこれらの作用、抑圧や抵抗の作用も、抑圧されたものと同じように、通常は患者自身には意識されない、つまり無意識的なものであって、精神分析の過程において感情転移現象の中で忠実に再体験され、あらわにされ、はじめて意識されるといってよいのである。このさいあらわれる抵抗の客観的徴候としては、患者の連想がきかないとか、連想がわれわれが問題としている論題から遙かに遠ざかってしまうというような形であらわれる。患者はいよいよ主題に近づくとか苦痛を感じるの、抵抗のあることは主観的にも認識できる場合もある。しかしこのことは何時もそうだというわけにはいかないのであって、多くの場合治療者が患者に抵抗の存在を示唆しても患者には全然理解できず、患者はただ連想のききにくいのに気づくだけである。このことによって抵抗が抑圧されたものと同じように患者には意識されない、つまり無意識的な作用であることが理解されるというのである。

以上のようにノイローゼ症状形成のメカニズムは、患者自身には意識されない無意識の過程で進行するといってよく、無意識的な心的過程が、この不治とも、生理的な生れつきとも、またきつねつきなども考えられてきた病気をつくりだしていたものなのである。しかもこの無意識的過程は精神分析によって意識におきかえられ、まちがいなく認識されることが、臨床経験から解明されるに至ったのである。こうしてフロイトは、人間の精神生活においては、無意識的な心的過程の想定が必然的であるばかりではなく、意識的過程に劣らずこの無意識的過程が人間の行動に重大な影響を及ぼすこと、つまり他ならぬ病気までも作ることを認めないわけにはいかなかった。ところがこの認識がまた既成の精神科学に対してそれだけ多くの根本的変革——人間の精神と意識とを同一視していた意識心理学の基盤そのものを揺がすものをふくんでいたといえることができる。フロイトの学説が特にその成立のはじめにおいて、学問の世界から袋だたきといつてよい程の総スカンの待遇を受けなければならなかった事情——フロイトにヒントを与えたブロイエルのみならずジヤネー

(P. Janet) といった人々が、このためにあわてふためいて退散しなければならなかった事情——は容易に想像できるところで、フロイトが被害妄想から描いた恐怖夢とばかりはいえないのである。ただフロイトは、ブロイエルなどとはちがって、この精神病治療によって生計をたてる決心をし、これに一生をかけていたのであるから、彼らにならってこの真実から目をおおって簡単に退散するわけにはいかない立場にあったともいえる。

フロイトは後になって、彼が直面した当時の事の重大性について次のように述懐している<sup>(15)</sup>。  
「人類はその素朴な自惚れに、時代の経過するうちに二つの大きな侮辱を受けねばならなかった。第一は、地球は宇宙の中心ではなく、その大きさを殆んど想像することのできない宇宙系の渺たる小部分であることを人類が知ったときである。それは——我々にとっては——コペルニクスの名に結びつくものである。第二は生物学的研究が人間の自称した創造の特権を無効にし、人間は動物の国から進化してきたものであり、その動物的本性は消しがたいと教えたときである。この価値転換は現代においてはダーウィン (Ch. Darwin) やウォレス (Wallace) の影響のもとに、同時代の人々の極めて劇しい抵抗を受けて成就せられたのである」。そして「今や」とフロイトはつづけるのである。「人間の勿体ぶる性癖は、第三のそして最も手痛い侮辱を、今日の心理学的研究によって——なわちす自我はわが家の主人であるどころか、自分の心生活の中に無意識に起りつつあることについては、乏しい報告を頼りに生きているに過ぎぬ——ということを実証せんとする今日の心理学的研究によって——受けねばならないのである。この反省の警告をもまた、コペルニクスの転換が既にそれより早くアレクサンドリアの学問によって示唆されていたように、我々の精神分析医が最初に且つ唯一の警告者として持ちだしたのではなかったが、しかしこの警告を最も強く主張し、誰の胸にも響く経験材料によって裏書きすることは、我々にとっては分相応であるように思われる。これすなわち我々の学問に対して総反抗が起り、一切のアカデミ的慇懃さが失われ、反対論が公平無私な論理のあらゆる手網から解き放たれた所以であり、そのうえおまけに我々はこの世界の平和を更に別の仕方ですら乱さなくてはならなかったが、それについては程なくお耳に入れるでしょう。」と。

フロイトが無意識の発見の意義を自らコペルニクスの転回と対比させて考えていることはともかくとして、僅か半世紀とたたぬうちにそれまでは全く無視されてきたものを、前述のように学問の世界のみならず日常生活においても、広く認めさせた功績の大半は、まさしくフロイトのいっているように彼および彼の同調者の活動に帰せられてよいであろう。

ところでこの無意識の警告によって平穏無事な意識心理学の世界にすすんで波風をたたせたフロイト自身が、ここですべて世界の平和を乱し、またまた口を開くやいなや学問の世界から総反撃をくらい、あたかもこの世から追放されたかの如くに感じなければならなかった「別の仕方」といっているものは何か。他ならぬ性欲の唱道——幼児性愛の警告のことである。それはこの無意識過程の発見とどうかかわりあっていたのであろうか。

## 6. 小児性愛とエディプス・コンプレックス

ノイローゼの原因が、過去の無意識的な心的葛藤にあり、ノイローゼ症状が抑圧された過去の苦

痛な感動興奮とこれを意識させまいとして働く無意識的な抵抗とのひとつの不幸な帰結であることを解明したフロイトの探求の眼が、すすんで次にはその病因となっている抑圧されなければならなかった過去の感動興奮とはいかなる性質のものかという、いわば病因論に集中していくのはまた当然のなりゆきであった。ノイローゼの過程がいかなる基盤の上に成立するかという病因論については、まだ何も明らかにされていない。経験と観察が進むにつれて、フロイトはノイローゼという現象の背後に働いているこの感動興奮は、どういう種類のものであってもよいのではなく、きまって性的性質をおびたものであること、過去における性的な体験——その多くは患者の直接的な実際の体験ではなく、願望による空想から発する体験ではあったが——の後作用であることを認めないわけにはいかなかった。そのうえ更に探求をつづけていくにつれて、より以前の生育期へと導かれていき、遂には患者の最初の生育期、乳幼児期の体験へとつきあたったのである。つまりノイローゼの病因となっている過去の感動興奮は、何時もきまって乳幼児期における、いわば性的願望の空想興奮にもとづく体験であることを認めないわけにはいかなかった。そしてフロイトがこの乳幼児期性愛の事実の前にたったとき、フロイトに対するアカデミズムからの追放宣言は、決定的なものとなったといえる。何故ならば人間の犯してはならない昔からのタブーによれば、乳幼児期とは誠に「無邪気なもの<sup>(16)</sup>」であり、性的なはげのい欲情からは自由な神聖なものであり、官能性という悪魔との斗いは思春期の狂瀾怒濤時代の訪づれとともに、はじまらなければならないことになっていたのだから。しかしむろん以前から、人類はこの神聖でなければならぬ幼児にも、時として説明のつかない性的発作にも似た行為のあることを認めないわけにはいかなかった。ただ強力なタブーの存在するところでは、これらの発作は文字通り発作にすぎず、変質的なもの、早期の墜落の徴候であり、自然の珍奇な気まぐれとして、いち早く処理しておかなければならないもののひとつとなっていたにすぎない。

ともあれ、ノイローゼ症状は抑圧された性愛の代理（或は代償）形成であり、乳幼児期に存在した性的体験（多くは願望による空想的な感動興奮）の後作用であることが明らかとなった。実際ノイローゼの治療過程で、患者の大部分は成人による性的な誘惑を内容とするような幼児期における光景を再現したし、女性の場合には誘惑者の役割はいつもきまって父親がおわされるのを常とした。しかしこのことは、患者の描くこうした甚だ劣悪的な近親相姦的誘惑の光景が、過去に実際に実在したということを直ちに意味しているのではむろんない。われわれの日常生活では父や母や兄や姉或は大人が不用意にも、時には故意にすら、性的な表現を小児の前にひけらかすことは少くない。これらのことが確かに小児の性的な欲望や空想をかりたてる事実をわれわれはよく知っている。しかし父や兄がかくも多くわが子、同胞の誘惑者として登場するとは容易に想像できることとはいいがたい。したがってむしろ患者が描くこれら誘惑の光景の描写の多くは、むしろ患者自身の感受性の側に原因があるものとみなさないわけにはいかない。そして実際にも患者の描くそのような光景は、現実に実在するものは少いことが解ってきた。つまり患者自身が何らかの理由で描かなければならなかった、実在しない空想の産物なのであった。（だからこそ余計に抑圧されもしなければならぬ運命をになって登場したともいえる）。フロイトはこの経験から、ノイローゼ症状は直接的な実

際の体験から発するものではなくて、悲しい実現不可能な願望による空想から発するものであること、またノイローゼにとっては、物質的な実在よりもいわば心的な実在の方がより大きな意味をもつものであるという結論を導きだした。つまりフロイトが幼児性愛というとき、直ちに小児にも成人と全く同じような性愛の存在を想定しているのではない。小児に成人と同じような生殖作用を含む、性愛の不可能なことは自明のことである。ただ性愛の事実は思春期の訪づれを待ってはじめて突発するのではなく、まわりくどい発達という道程を通して遂には成人性愛にまで達する、いわば小さな芽生えともみられる性愛が、小児期にもまちがいなく実在するという至極もっともな主張に帰一する。つまり小児の性愛が成人のような完成した形をとりえないが故に、悲痛な運命をたどらざるをえないのであり、したがってまたノイローゼの原因ともなるのだということもできよう。

要するに性的な機能ははじめから存在していたのであり、ただ最初には性愛以外の生存に必要な他の機能に依存しているのであり、ついで後にそれらの機能から独立して、やがて性器に統合されるという過程を通して完成されるべきものだったのである。ただこの点で奇妙なことは、人間の性生活の場合、中間に潜在期とよぶところの休止期をはさんで、二時相的な傾向を示しているようにみえることである。人間の性生活は4才から5才の頃にかけて第一次の最盛期に達し、やがて衰え、それまで活発であった性的欲求は抑圧作用の働きをうけて潜在期に入っていく、この潜在期は思春期に至るまでつづくのである。この潜在期は確かに生理的な現象でもあるが、この時期に完全な性生活の中絶がひきおこされるのは、その社会の成立上小児性愛の存在が邪魔であるが故に、おさえつけてしまわなければならないということを、その社会統制及至教育のプランの中にとりこんでいるようなりたちの文化社会だけのことである。その証拠にはたいがいの原始民族ではそういう事実はみられないというのである。したがってそのような文化社会では、この時期に抑圧の作用を完全なものにするためにも、道徳とか羞恥心とか嫌悪というような抑圧された性愛の反動形成物が、いろいろと複雑におりなされて建設されていくことになる。こうしてすべてわれわれ成人が経験してきたところの小児期に対する忘却の事実は、この抑圧の作用のために完全なものとなっていたのである。ところで性的発達にみられるこのような二時相はあらゆる生物の中で、ただただ人間のみ与えられたもののようである。恐らくはこの事実が人間のみがノイローゼになりうるという生物学的な条件となっており、人間のみが反動形成物としての文化に浴しうるという確かな証拠ともなっているといえる。

ともあれ小児性愛の発達の途次多くの部分欲動は最終の目的にとって不必要なものとしてすてきられたり、他の用途にふりむけられ、他のものはみなその目標を転ぜしめられ、性器の統裁下におかれるようになる。こうしてフロイトは人間の発達を性愛的欲求の経めぐる快感追求器官の段階的展開の過程としてとらえ、はじめは催情的な身体部位と関係があり、その中心がはっきりせず、自体愛的である。が、後にそれらの中に集中化がみられるようになり、第一の段階では口唇的成分が支配的となり、ついではサディズム的肛門愛的な時期が、そして最後の第三の時期に至ってようやく性愛が最優位をしめるようになり、それとともに性愛の機能は生殖という役割の中にはいることになる考えた。そして性愛的欲求のエネルギーを特にリビド（Libido）と名づけ、リビドは必ず

しも上記のような発達を常に完遂するとはかぎらないとみた。つまり個々の成分が強すぎる結果として、あるいはあまりに早期に欲求が満足されるという体験の結果として発達の途上においていわゆるリビドの固着ということが起ることがある。そして後になって抑圧をうけた時に、その場所へとリビドはもどっていき（退行）、ここから症状への炸裂が起る。したがって逆にいえばリビドが発達途上において何処に固着するかによって、後になって発生する神経症の症状も自らきまってくるということになる。

ともあれ小児性愛の事実の発見は、性愛があまりに密接に性器のみと関係づけられて考えられてきた、従来の誤謬から人間を解放することを意味していた。性欲がより広く包括的な快感を追求める機能であり、と同時に性愛には肉体的な側面があり、ある化学的過程が想定されねばならぬというのである。性的な興奮はたとえ未だ知られていないとはいえ、何か特定の物質の介入があってはじめて可能であり、それを取りこむことによって発動するというのである。そしてその特定の物質こそは本能とよばれるものと強く連っており、生命ある有機体を動かす根本的、本質的な快感追求過程を支配するものである。この機能が後になって第二次的に生殖という仕事をするようになるものと考えた。この性愛を性器から解放する思想は、乳幼児性愛および性の倒錯者の性的活動を正常の成人のそれと同列のものとみることによって、この不確かなものにも理解と考究の手がかりを与えることになった。

つまりフロイトの見解からすれば、最も奇妙な最もいとうべきものとされてきた性的倒錯症も、リビドが正常な発達を完遂することができなかったが故に、性器が優位をしめる体制からはずれた、リビド発達という点では原初の段階においてみられるような、それぞれに独立的に快感を求めている部分欲動の表現にすぎないことになる。まして性の倒錯のうちで、対象をとりちがえているが故に最も奇妙で、最も忌むべき変態とされてきた同性愛は、体質的な両性具有性の後作用に帰せらるべきもので、どの人にもいくらかづつの同性愛的な対象選択がみられることは容易に証明され、指摘されうると主張される。したがって不自然なものにみえた幼児性愛や、これらの倒錯現象も、発達段階にたちはだかる障害の処理如何では、誰でもがなりうる可能性をもっているものであり、それはいってみれば不幸な運命の性愛表現であり、同情されてこそ然るべきもので、ゆめゆめ道徳的な価値判断から解釈さるべきものではないということになる。ましてやわれわれがやさしい感情として唱道するようなすべての感情のたかまりも、根源的には全く性的欲求のたかまりであったものであり、後にその目標を抑制されたものか、昇華されたものに他ならないのであるから。つまり性的欲求が示すこのような被影響性や被転導性の上にこそ、人間のみに固有なさまざまな文化的機能の発達と、万物の霊長たる人間の特徴が形成されるものとなるのである。またフロイトによれば、潜伏期前の幼児における性的過程がある種の終結をみた場合、人間の最初の愛の対象はきまって母だという。そして性的志向の心的側面を前景におしだして、その根底に横たわっている身体的又は官能的本能要求をおしとめたり、一瞬忘れようとしたりする際に、愛という言葉が使われる事態が生ずるのである。したがってこの母が愛の対象となる時には、既に子どもには抑在という精神的作業が始まっている証拠であり、その故に子どもはその性的目標のある部分（肉体的官能的部分）の存在



を知らないでいるにすぎないというのである。

ところで母をかく愛の対象に選ぶということには、精神分析的説明がよってもってたつ重大な基盤、すなわち近親相姦愛の重視、つまりエディプス・コンプレックスの名のもとに総括されるところの一切のことが含まれているといえる。エディプス・コンプレックスの名はギリシャの伝説から借りてきたもので、エディプス王は暴君たる自分の父を殺し、自分の母を妻とするように運命づけられているのに、この神託から逃れようとしてあらゆる手をつくす。しかし知らずしらずのうちにやはりこの人間にとって最も重いはずのふたつの罪を犯したという事実を知り、その苦痛な感動興奮に圧倒されて遂にわれとわが眼をえぐるという結末に終わったというのである。つまり子どもは異性の親を結婚の対象として選び、わがものとしたいという強い欲求にかられるとともに、同性の親を性的に邪魔な競争者として憎悪し、亡きものとしたい強い欲求にかられるというのである。その有力な証拠としては、今日なお生存している原始人や蛮族の間では、近親相姦の禁止——何か信頼すべき自然的抑制があるならば、掟や習俗による厳重な禁止は不必要であるはずである——は、われわれ文明人の間よりもずっと厳重になっていること。そして未開人の成年式には、男の子とその母親との近親相姦の結びつきを解消して、父親との宥和を怖復するという意味が含まれている場合が少なくないなどがあげられる。ところで母との結婚はエディプスの一方の犯罪であり、父殺しは他方のそれであり、そしてその罪悪感こそが神経症者がしばしば苦しめられているものの重大な源泉とみてさしつかえないものなのである。その証拠に患者を分析してみると各自がみなエディプス王であったこと、あるいはこのコンプレックスの反応において一人のハムレットになった事実がきまってあらわになるというのである。

ともあれこのエディプス・コンプレックス期における対象選択は、性本能が最初に十全な強さで自己を主張する、思春期における対象選択の前奏曲にすぎないのであって、極めてすみやかに経過することを特徴としている。つまり幼児の性生活の早期開花は、その願望が現実と和合しないことと、および子どもらしい発達段階の不完全さのために、まさに衰滅することは必定である。しかもそれはきわめて悲痛な機縁のもとに、激しい苦痛な感覚をとめないながら消滅する運命にある。この最初の愛の喪失と獲得の失敗とは、神経症者にしばしばみられる劣等感の最大の原因となる。小児の身体発達のために制限される性の追究は、満足な終結をみるはずのものではないから、後になって、私には何もできない、何ひとつうまくいかないとなげく劣等感の主要な基盤を作りあげてしまうことになる。主に異性の親との間に結ばれる愛の絆は幻滅に終り、むなしい満足を期待するはめとなり、その頃に生れてくる新しい子どもの誕生（弟や妹）は父又は母の不実を物語る明らかな証拠と受けとられ、かいなき嫉妬の感情をいやがうえにもかりたてることとなる。そしてそういう子どもを自分でも創ろうとする幼児の痛ましくも真剣な試みは、発達の不完全さのために当然屈辱的な失敗に終ることは必定である。かてて加えて、これと相前後しつつ始まる自分自身にそそがれる親の愛情の減退（愛情が形をかえる）、と同時にこれと交替するように加わる高まる教育上の要求からのきびしい言葉や折にふれて発せられるきびしい叱責や処罰などは、かつてのように愛されつつけたいと願う子供にとっては、このうえとない侮辱の数々ということにもなる。これらのこと

はエディプス・コンプレックス期の悲痛な運命をいやがうえにも強化し、これに色どりをそえるものとして働くであろうことは容易に想像できることである。そしてこの激しい苦痛をともなって潜在期へと消滅していったエディプス・コンプレックスの形式、つまり近親相姦の対象選択の結末は、思春期の訪づれとともに、またあらたにより強いリビド配給をうけることになる。が、しかしこの時には既にその前提となっているものが、他ならぬ潜在期に授けられる教育の故にたえがたい存在となってしまう関係上、その大部分が意識から遠のかざるをえなくなる。つまりこの時から人間の子どもは親から離れるという大きな課題に身を捧げなければならないことになり、親から離れてはじめて人は子どもであることをやめ、社会的共同体のメンバーになることができるのである。この課題は息子にあっては、己のリビド的願望を母親から離し、ある現実の見知らぬ「愛の対象」を選ぶために使用し、もし父親と反目状態にあるならば父親と宥和し、もし幼児性反抗の反応として父親に屈服しているならば、その圧力から脱するという形をとって行われるのである。同じことは、関係をかえれば、娘の場合にも起る。ところがこれらの課題は人間なら誰でも直面することであるが、その解決が理想的な仕方である——いいかえれば心理的にも社会的にもちゃんと正しく行われることの方がむしろ稀であるという点に問題がある。むろん神経症者の場合はその極端な場合であるが、その解決は一般にうまくゆかず、息子は一生涯父親の権威に膝を屈したままで、己のリビドをある見知らぬ性対象へ転移させることができないのである。この意味でエディプス・コンプレックスこそが、神経症（ノイローゼ）の最大の原因であり、核心であるといえることができる。フロイトは、たとえば次のような若い娘の例をあげて、その実情を説明する<sup>(17)</sup>。

19才になる、豊満な、天分あるひとり娘。子どもの時にはおてんばで、非常に陽気な子であった。が、最近になってさしたる外的影響もないのに、目にみえて神経症的症状を示すようになってきた。そのめだつ特徴としては、特に母親に対して甚だ怒りっぽく、何時も不満の様子で、ふさぎの虫にとりつかれたものようであった。そして優柔不断で、甚だしく懷疑的となり、遂に広場や大きな通りをもはや一人では歩けぬというような症状を呈しはじめた。つまり臨場苦悶と強迫性神経症の診断を受けるまでになったのである。ところでこの娘には他に独特のいわゆる睡眠儀式的習慣があり、両親を悩ましてきたが以下は特にこれについての報告である。

睡眠儀式といえば、ある意味では誰でもが持っているともいえる。それをみたまないとねむれないというような、ちょっとしたきまりを何時とはなしにつくりあげて、誰でもが覚醒生活から睡眠状態への橋渡しとしてしているといえる。だから、何もこれだけでは彼女だけに特有な珍奇な習癖ということにならないだろう。しかし健康者の場合のこうした習癖は、何かしら頰笑まじいたぐいのもので、その意味も一般に理解の手のとどく範囲をでるものではない。そして旅行などやむをえない外部事情が加われば、容易に周囲の状況に順応でき、変更がきく程度のものである。むろん彼女の場合にも、表面上は健康者の場合と似せて、合理的という仮面をかぶっている。したがってちょっとみにはさほど変わらず、ただいささかその儀式的運行とテンポが慎重にすぎるといった程度の特徴をそなえているにすぎないものであった。しかし内面にかかわるにつれて、次第にその顕著性ははっきりしたものとなる。儀式はいかなる場合にも変更は拒否され、極めて大きな犠牲を払っても、

なおかつ強行されねばならないのであった。そしてその儀式の睡眠に対する合理性も、次第に一般の理解をこえたものとなっていく。すなわち儀式は次のように展開されていく。まずねむるには静かでなければならぬから、あらゆる騒音の原因となるものは排除されねばならないと称し、自分の部屋にある大時計はとめ、他の時計は、ごく小さな自分の腕時計すらすべて室外に出さねばならないことになっていた。また植木鉢や花瓶は、夜分に下に落ちて騒音の原因にならないとも限らないというわけで、すべてひとつの机の上に集められねばならないことになっていた。

さて小さな腕時計なら部屋の中にあっても騒音の原因にはならないだろうし、大時計の規則正しい音は必ずしも眠りを妨げるものとはならず、かえって就眠を促す役目すら果していることをわれわれは経験によって知っている。まして植木鉢や花瓶が静かな夜になって、かえって置いてあったところからひとりで落ちて、こわれるなどということは杞憂も甚だしいことだといわねばならぬ。彼女もそれについてはよく知っていた。したがって騒音防止という表面上の理由は、口実にすぎないのである。それは次のことから理解される。すなわち彼女は儀式の中で、自分の部屋と両親の寝室との間のドアを半開きにしておくことを要求しているのである。これはむしろ眠りを妨げる騒音をこそ、観迎しているていものとしか思われぬ措置である。

ところで彼女の睡眠儀式の最も重要な部分は、ベッドに関係する部分から構成されていた。それによればベッドの頭部のクッションはベッドの枠板に触れてはならず、そのクッションの上に重ねられたこれより小さい枕用のクッションは、菱形におかれていなければならないことになっていた。そうしておいて、彼女は自分の頭をきちんとその菱形の縦の対角線上におかねばならない。また羽根入りの掛けぶとんは掛ける前にふるわないと気がすまず、そのために足の方にあたる部分に羽根が集りその部分がたいへんふくらむが、故意にふくらましておいて、彼女は今度はそれを丁寧に押しつぶしてならすのであった。彼女の儀式のおおすじをのべれば以上ようになっていたが、以上の過程は必ずしもスムーズに行われるとはかぎらなかった。彼女自身それが心配でうまくいっているかどうかを吟味するために、必ずもう一度同じことをくりかえすことになっており、いちいち確かめるということになり、すっかり儀式がすんでしまうまでには一時間も二時間もかかるということになっていた。したがってその間は娘はもとろん、娘のこの手のこんだ儀式に恐れをなした両親もまた眠れない、というはためいわくなことになっていたのである。

（経過）この儀式に対する分析は、むろん簡単にうまくいくというわけにはいかなかった、とフロイトはのべている。はじめ彼のだした解釈の提案は、その都度拒否されるか、軽蔑的な疑惑の念をもってうけとめられる他はなかった。しかし彼女自身の骨折によって、次第に記憶はよびおこされ、記憶の間に脈絡がつけられ、遂に解釈は容認されることになった。そしてその過程で強迫行為はさしひかえられるようになり、治療が終りをつげる前にこの儀式はすっかりとりざげられることになった。

（解釈）まず時計は、女性が自分の月経が時計仕掛のように規則正しいことをたまたま自慢するように、その週期的進みと同一の時間的間隔との類似点から女子性器の象徴と考えられる。したがってこれを外に出したのは、夜分それを守るという動機からであったといえる。その場合時計の音

によって睡眠が妨げられるからという理由づけがなされていたのには、次のような事情がかくされていた。時計の時をがちがちときざむ音は、性的興奮時における陰核の鼓動と同一視される。彼女は実際当時悩ましく起るこの感覚によって何度も眠りからさまされていたのである。つまりその象徴たる時計を、身辺から遠ざけなければならない強い衝動にかられていた。すなわちこれによって、雑念から救われようとしたのである。

次に植木鉢と花瓶は一切の容器と同様女性的象徴であって、その証拠にわれわれは婚約の際に器物を打ちくたくという習俗がひろくひろまっていることを知っている。したがって夜分落ちてこられないようにという用心には、当然あるりっぱな意味がこめられているとみることができる。なおこの措置の理由にされている騒音防止には、このさいそれ程の意味があるとはいえない。そもそもこの儀式が睡眠と関係して形成されたものなのだから、形成途上でまきこまれ、儀式の表面上の体裁をととのえさせたものとみるべきだろう。ところで彼女の儀式の中心は、むろんベッドとクッションの方にあった。彼女にとってクッションは常に女子であり、直立している杵板は男子を意味していた。したがってクッションが杵板にふれてはならないというのは、男と女を離しておこうとした、つまり両親の間を割いて夫婦の交わりをさせまいとしたのである。その証拠にこの儀式を計画する以前には、彼女はもっと直接的な方法でその目的を達成しようと努めていたからである。彼女は不安を装ったり、いろいろな理くつを利用して、両親の寝室へ通ずるドアを閉めさせないようにしたのであり、その残滓ははっきりこの儀式の中にもとり入れられている。こうして彼女は聴耳をたて両親を監視する機会をつくって邪魔だてしたが、そのために当然のことながら何カ月にもわたる不眠症に悩まされる結果となった。こうして彼女は、かえってその後時々、この不眠症などを理由に、実際に両親のダブルベッドの中にもぐりこみ、父と母との間に寝かせてもらうことによって、直接的にその目的を果す機会をもみつけたのである。つまりこれによってクッション（母）と杵板（父）は事実相接することをさまたげられたのである。その後やがて彼女のからだは、もはや両親の間に楽に寝ることができない程大きくなったとき、彼女は意識的に不安を装って、母親から夫の傍の位置を譲りわたさせることに一再ならず成功してゐる。この局面は確かに彼女の空想のおおづめとなるところのもので、その影響は、他ならぬ儀式の中にはっきりとよみとれるのである。

すなわちクッションは女子であったから、羽根入り掛ぶとんをふって羽根がみんな下の方にたまってふくらみができるということは、女をはらませるということを意味し、このふくらみをなでて元どおりにするというのは、これをうちけすことを意味していた。彼女は両親の交わりによってもう一人子どもが生れ、自分の競争者ができはしないかということをずっと恐れつづけてきたのであり、それはまた父親の不実証拠をみたくないというしつような努力のあらわれでもあった。そして大きなクッションは母親で小さな枕用クッションは娘を象徴していたと考えられる。何故そのクッションを菱形におかねばならなかったか。菱形はどこの国の壁にも落書きされたのがみられるように世界共通の女子性器の象徴である。したがって彼女がこの菱形の二等分線上に頭をおかねば気がすまなかったというのも次のように解されてしかるべきである。彼女は自分の頭で男子の性器を代理させることによって、父親に求めてやまぬ役割を自分の手で果していたのである。これこそがこ

の一見手のこんだ儀式の背後にかくされていた意味であった。

（まとめ）以上の解釈をみて、とんでもない、生娘の頭の中をそんな妄想がかけめぐりうるなどと、想像するだけに恐ろしいことだというなかれ。むろんわれわれとて、純真な生娘に儀式の意味が明瞭に認識されていたなどと、主張しているわけではないのだから。つまり無意識的なものが、常に彼女を行動にかりたてていたのであって、儀式の中のいろいろなきまりは、きまって願望のそれも常に性的な願望の或は積極的な、或は否定的な表現なのであった。時計という時計を外に出し、植木鉢や花瓶を机の上に集めたのも、性的願望を防止しようとの表現であり、クッションを枠組から離したり、羽根ぶとんの形をくずしておいて、後に丁寧になおしたのも、また菱形においた小さな枕用のクッションの二等分線上に頭をおかねば気がすまなかったのも、きまって性的願望主張の表現なのであった。そして話のすじをなりたたせているものは、自分と父親とのエロティックな関係であり、母親は常にその中に割って入っている邪魔者、わが切なき願望をなきものとしている憎き恋敵としてあつかわれているのである。

つまりこの若い娘は、思春期以前にできてしまった父親とのエロティックな結びつきのままに固定されてしまって、それから自由になるすべを知らないために、現在と未来の生活に背をむけざるをえなくなっているのである。彼女は自分自身としても、こんなに患っているのだから結婚することはできぬと決めたのであり、また結婚しなければならないという法律もないのだから、何時までも父親の傍にいたのだとがんばっているわけである。つまり父親の傍を離れないために、このような病気をわざわざつくりだし、その中にかくれすむことによって願望を達成したのである。これが彼女の睡眠儀式の意味であり病気の原因であった。

ところでエディプスコンプレックス期の望ましからぬ事態と苦痛であった情緒状態とは、すべて神経症者によって感情転移現象のうちに反復され、きわめて巧妙な息吹きを与えられるのである。この感情転移現象は前述のように、治療過程において患者の快癒への願望の代りにまもなく現われてくる現象である。この感情転移現象の中で再体験されるすべてのものは、どれひとつとして当時は快をもたらすものではなく、不快な現象であったし、今また再体験されることは不快なはずなのに、これらの体験はある種の強迫にかりたてられるかのようにきまって再体験されるのである。ある時は陽性のこともあり、時には陰性の性質のときもあり、情熱的で全く官能的恋著から、反抗、怒りおよび憎悪というような極端な変化を示す。それが優しさと呼ばれる程度の適度な状態にとどまっている場合には、分析作用を促進し、可能にするばねのような働きをなすが、やがてそれは情熱的となるか、逆に敵対的な性質のものに代ると、回想を追い退ける抵抗のための主たる道具となってしまう。彼らは治療を中絶させようと努め、侮辱される感じをうけるようにふるまい、治療者が自分たちにきびしい言葉と冷淡な態度を示すようにしむける術をもこころえているのである。つまりそれらはあのエディプス・コンプレックス期に抱いた近親相姦的な実現不可能な性的願望空想が、抑圧作用のもとに激しい苦痛をとまなげて消滅していった不運な結末の再現なのであり、したがってこの感情転移の現象が、かつて抑圧したものの側の、これをありのままに再現させまいとして働いている抵抗に奉仕していることは明らかである。したがってそのさいには患者の追想の活

動はのろのろとなり、治療の効果は危殆に瀕するようになるが、これをさけようとすることは無意味なことであり、精神分析そのものを不可能なものにしてしまう。つまりこの感情転移の現象こそがかつてカタルシス技法の効果を永続的なものにみせたり、みせなかったりさせてきたものであった。そしてエディプス・コンプレックス期に患者がある人に抱いた熱情的な感情興奮をフロイトに転移させて、彼の首に腕をまきつかせ、フロイトに少からずショックを与え、急ぎカタルシスから退散せしめたものであり、催眠術がなりたつ基盤そのものであったのである。

したがってまた精神分析も他の心理療法と同じように暗示 suggestion を媒介として働くことには変りない。ただそのさい催眠療法とちがって暗示とか感情転移現象にその効果のすべてがゆだねられているのではなく、これを利用して患者自身に心的作業を遂行させる点にこれまでの方法との間にちがいがあつた。そして精神療法はその利用の仕方によって、次第に変更を加えられてきたのであり、精神分析は最初は解釈の技術として出発したというべく、患者の気づかぬ無意識的となつてあるものを推測し、構成しそれを適当な時期に患者に告知知らせることであつた。しかし治療上の課題はそれではなかなか解けなかった。（すなわち患者の抵抗は強く、患者は告知知らせるものについて何も知らないと頑強に否定するのであつたから、所期の目的を果すことはできなかった。）そこで最大の問題は患者の抵抗ということになり、抵抗をできるだけ早く発見して患者に示し、人間的な影響（ここでは感情転移として働く暗示）をおよぼすことによって、患者に抵抗を放棄させるといういわば解釈の確認の技術ということになった。だがそのうちに無意識を意識化するという目標は、この方法でも完全には達せられないことがますます明らかとなつた。患者は自分の中の抑圧されたものをことごとく思いだせない。恐らくは本質的なものこそ思いだすことはできない。したがって自分の聞いた解釈の正しさには確信がもてない。そこで患者は抑圧されたものを医師が望むように過去の一片として追想する代りに、現在の体験として反復するように余儀なくされる。この再現は患者にとつても望ましくはないが、いとも忠実に登場して、何時も小児の性生活、したがってエディプス・コンプレックスと、それからの派生物との幾分かを内容としており、医師に対する関係という感情転移の領域で規則的に演じられるのである。治療がここまで進めば、以前の神経症は新しい感情転移神経症にとつてかわれられたのだということになる。医師はこの感情転移性神経症の領域をできるだけ制限し、できるだけ多く追想するようにしむけ、できるだけ少ししか反復をゆるさないように努力する必要があるだけである。追想と再現との間の関係は個々の場合でちがうだろう。だが医師は患者に治療のこの段階を免除してやるわけにはいかないのであつて、患者に忘れている生活のある一片を再体験させねばならず、またある程度の思慮の余裕を残しておき、外見上の現実が忘れた過去の反映であることをさとりように心をくばらなければならない。これがうまくゆきさえすれば患者の確信と、それにともなう治療上の成果は達成されることになる。

ところで神経症者の精神分析的治療の間にあらわれる、この反復強迫をよく理解するためには、まず第一に抵抗を克服するさいには、無意識の抵抗と闘わねばならぬという言葉にまつわるであろう誤解をただし今一度じゆうぶんに確認しておく必要があろう。前述のように確かに抵抗は無意識でありうるどころか、多くは無意識的であるが、無意識といっても抑圧されたものは決して治療の

努力には抵抗しないのである。それどころかそれは重い圧力に抗して意識に達しようとしたり、実際に行動によって放出されようと努めこそすれ、抵抗などはしない。治療のさいにあらわれる抵抗は、だからかつて抑圧を遂行し、今なおその目的を完遂しつづけようとする、いわばより高次の精神生活の領域から発生しているものといわねばならぬ。しかし抵抗の動機は、いや抵抗そのものさえ、治療のさいの経験によれば、最初は意識されず、また容易は孤立されないために、前述のような誤解が生じやすいのであって、ちょっとみには、抑圧されたものが抑圧されたが故に、今は意識されることに自ら抵抗していると考えられがちとなるといえよう。つまりわれわれは、われわれのこれまでの表現方法を整理し、改める必要に迫られているといえるのであって、意識と無意識とを対立させるかわりに、抑圧されたものと、他ならぬその抑圧を遂行しなければならなかったより高次の精神領域（生後、新しい環境の中でわれわれ生あるものが生きつづけるためにわれわれ自身の中から派生せしめなければならなかった現実考慮の精神領域、これこそが自我とよばれるべきものであると、フロイトはいう）を対立させるならば、あいまいさは克服されえよう。確かに自我のある部分は意識されない。自我の核心とよばれるものこそ意識されないともいえるのであって、われわれは自分のやっていることに、責任をもてないものをたくさんもっているといわねばならぬ。われわれに固有なこの我、われわれがこれだけは確実なものとして前面におしだして自惚れてきたわれわれに固有なこの我、自我なるものは、このようにわれわれに意識されないところで、つまり無意識のうちに重大な作業をしてしまうのである。他ならぬ抑圧をなしとげ、今なおその抑圧の作業を完遂するために抵抗の作用を無意識裡に及ぼしているのがこの我であり、ノイローゼはこの自我の作用と、抑圧されたものとの対立の不幸の結果なのである。このように考えてはじめて抵抗が抑圧を完遂しようとする自我から生ずる作用であること、そして反復強迫が逆に抑圧されたものに帰せらるべきものであることが理解されよう。つまり反復強迫は治療の操作によって、抑圧の作用が緩和されるまでは恐らくは発現することはできないものなのであった。だから反復強迫を助けるものは治療の暗示作用なのであって、両親コンプレックスにもとづいた無意識の医師に対する従順さであることをつけ加えておくことは、恐らく無駄なことではないであろう。

以上のようにエディプス・コンプレックスこそがノイローゼの中核であることが、次第に明らかとなり、他ならぬエディプス・コンプレックス期の望ましからぬ事態や苦痛な状態は、ノイローゼの治療過程における感情転移現象の中ですべて反復体験され、男性患者の場合には通例自分と父親の関係を、かつての父親の位置に医師をたたせるように転移させ、治療に対する抵抗に役だてようとする。治療がここまでくるとノイローゼは感情転移性神経症にとってかわったのであり、これらの抵抗を克服することは分析の本質的な仕事であり、われわれが患者に対して何かをなしたということのをわれわれに保証する唯一の作業部分でもある。つまりこのような変換によって感情転移は抵抗のための最も有力な武器であることから、かえって分析による治療にとっての最上の道具となるのである。したがってこの感情転移のとりあつかいは分析的技法における最も困難な部分であるとともに、最も重要な部分といえる。つまり感情転移現象が治療にとって邪魔であるからといってこれをさけようとすることは、分析そのものを無意味なものにするのであって、感情転移のない分析

というようなことはありえないのである。また逆に分析が感情転移をつくるものであり、感情転移が精神分析においてのみ起ると考えてはならない。感情転移現象は人間一般にみられた現象なのであって、ただ分析はこの感情転移をあらわにし孤立化させることによって治療に利用する点に特徴があるといえる。ともあれエディプス・コンプレックスこそは、小児期性愛生活の預点であるのみならず、そこからその後のすべての発達——人間らしい発達が発足していく節点でもあり、エディプス・コンプレックス期の近親相姦的な実現不可能であるが故にこそ苦痛にみちた体験が、すべての人に感情転移現象を発生させる原因となっているものであるということが出来る。つまりノイローゼはこれといって特別な、それだけに特有な内容をもっているのではなく、正常な人間の場合には運よくも克服されたものと同一のものについて破綻をきたしているにすぎないのである。フロイトはこの洞察によってノイローゼ治療過程の観察から発見された深層心理学は、精神病理学という病人だけに関係する学問であるだけでなく、まさにそれはまた正常な人間の心的生活にもあてはまる心理学でもあるということをつきだした。フロイトはこの発見を次のように説明している。「それは」いってみれば「ちょうど化学者のような経験をしたということなのであった。産出されたものにみられる大きい質的な差別が、実は同一の元素の化合の割合の違いという量的な相違に帰せられたのである<sup>(18)</sup>」と。

こうして精神分析学は、ノイローゼを解明しようとする単なる精神病理学の補助科学の位置から、人間の心理一般を問題とし、これを考究の対象とする科学、心理学の位置へと一大飛躍をとげるきっかけをうることになった。この飛躍がまた平穩無事な既成の心理学の世界を強く刺激し、総反撃をくろうもとなっている。ともあれ、フロイトは、以上の理論を、これまた既成の心理学が軽視乃至無視してきた夢現象や日常生活の失錯行為に大だんに適用することによって、その正しさの確固たる証拠をえようとしたのである。

## 7. 無意識の証拠

フロイトは、その膨大な著作の中で、夢の解釈こそは深層心理の過程の探求にみちびく一番確かな道とみなすことができる、という意味のことをくりかえしのべている。そしてその夢こそは、意識心理学では説明がつかないままに、長い間迷信にゆだねられてしまい、それは単なる身体的活動にすぎないとか、夢みる以外には眠っている心的生活の一種のけいれん（それにしてもこのけいれんはあまりに多過ぎる）のごときものとみなされてきたものであった。したがってまじめな学究的生活をしてきた人が、突如として夢の解釈者として登場しうるなどとは、考えてもみることもできないことであった。ところが自由連想法の操作とそれに付随する解釈法の助けによって、その外見上の内容はつとめてみないようにし、その個々の像だけを自由連想の対象となしたときに、精神分析学は一つの異なる成果に到達することになった、とフロイトはいう。つまり夢には意味があることを認め、ノイローゼの理解できなかった症状のようなもの、妄想とか強迫観念のようなものとして扱えば、その意味はまちがいに読みとることができるというのである。

精神分析学は更にこの夢の解釈につづいて、人間がしばしば犯すささいな間違いや失錯行為（或



は症状行為）の研究にも、この解釈法をあてはめた。これらの行為は、夢と同じく意識心理学では説明がつかないが故に、偶然のいたずら（偶然行為）とか、自然の気まぐれな行為とか、生理的ないれん行為としてうちすてられてきたものである。しかしこれらの行為もやはり偶然や生理学的な立場からだけではどうにも説明のつかないものであり、抑止されたり、抑圧されたりする無意識の心術を考えてみなければどうにも説明のつかないものであり、逆にこのかくされた過程を想定すれば、きまって説明の道がえられ、意味ある現象であることが解明されるのである。こうしてノイローゼの治療とその解明から出発した精神分析学は、前述のようにただに精神病者という狭い領域のメカニズム解釈に通ずるだけのものではなくなった。正常な人間の心理の理解をまさに対象とする科学、心理学そのものであることを実証する有力な証拠をうることになったのである。何故ならば夢や日常のささいな失錯行為の発生は、むしろ正常な人間であることの有力な証拠でもあり、誰でもが日常茶飯に経験していることである。そしてそれがまたノイローゼ症状形成のメカニズムと同じメカニズムによって発生するものであり、欲動のかたまりの抑圧であるとか、代理形成や妥協形成であるとか、意識的ならびに無意識的なものをしまっておくためには、さまざまな心的組織が必要であるというような諸仮定を必要とするものであれば、精神分析学の前提や結論はそのまま正常な人間の心的生活を理解するための不可欠の要素ということになるからである。

#### ④ 夢 学 説

フロイトは考える。「夢とはノイローゼの理解できない症状のようなもの、妄想とか強迫観念のようなものではないか<sup>(19)</sup>」と。催眠術にかけられた患者が、類催眠状態（夢遊の状態）からめざむるやいなや、その間に起ったことの多くを忘れてしまうのと全く同じように、われわれもまた夢みた後めざむるやいなや夢みた多くのことを忘れてしまっているではないか。しかもノイローゼ患者はベルネイムが主張していたように、実はそのことごとくを覚えているのであったし、われわれもまた確かにかなりの努力を要することにちがいないが、忘れていたはずの夢の内容を殆んど思いだすことができるではないか。そのうえ、夢にもノイローゼ症状に似て、あまりにわけのわからない、不条理で不合理な状況が多すぎ、正常な頭では理解に苦しむようなことが多すぎはしないか。恐らくはこの不条理な夢の背後にも、かつて不条理にみえたノイローゼ症状と同じように、何らかのかくされた、大いに意味のある心的過程がかくされているにちがいない。フロイトはこのように考えて、彼の作業を進めていく。

不条理で不合理な外見上の内容はみないで、夢にあらわれる一見無意味にみえる個々の像（多くは視覚像）を対象として、ノイローゼ症状の背後にかくされていた潜在的な病因の状況をさぐるように、その背後にかくされているいわば「潜在的な夢の思想」を注意深くたどっていく。その結果ノイローゼの症状が、かつて抑圧された欲動の正常でない、まわり道を通った変則的な代償充足であったのと同じように、夢もまた（抑圧された）願望の（変装された）充足であることが次第に理解されてきた。その証拠はまず小児の夢に典型的であるといわねばならぬ、とフロイトはたとえば次のような例をあげて説明する<sup>(20)</sup>。

はじめてボートで湖水を渡った生後3年3カ月の女の子が、やがて向う岸についた時、ボートから降りたがらないでひどく泣いたのである。その時は別に気にもとめなかったが翌朝めざめるやいなや、彼女は「ゆうべ湖水を渡ったよ」と話してくれた。すなわち彼女は昨日のボートの初のが、あまりにあっけなくすんだことに大いに不満だったから、泣いたのであった。したがって彼女がその晩夢の中で心ゆくまでボートに乗ることによって、たちまちみたされなかった昼の不満を解消したとしても、何ら不思議なできごとではないのであり、むしろきわめてありうることである。

小児ではまだいろいろの心的組織がはっきり分化していないし、したがって抑圧もまだ充分に深くまでなされているとはいえないから、小児はしばしば何ら変装することなしに、願望興奮をあからさまに直接充足するような夢をみるのできるのである。しかし成人とてもしばしばその例外でないことは、われわれ自身の夢が示している。が、しかし普通成人の場合にはノイローゼ患者の発生にみられるように、抑圧と抵抗の機制は強く複雑であるから、それだけ夢は普通変装され、わけのわからない不条理な体裁をととのえることになるのである。そしてわれわれの記憶から遠のき、われわれの解釈を不可能なもののようにみせるのである。しかしともかく夢が願望充足であることを指摘することは、それ程困難なことではなく、たとえば次のような例からも明らかによみとることができる<sup>(21)</sup>。

(1) フロイトの友人がフロイトにいった。「うちの家内が君に話してくれというのだが、月経になった夢をみたのだそうだ。どういう意味なのか、知りたいといってるのでね。」むろんこの夢の意味は明らかであるとフロイトはいう。若い女性が月経の夢をみる時は、月経がとまっているのだ。(つまりただ今妊娠中の意味)したがってその夢の意味は、妊娠する前にもう少しの間自由を享受したいということと解される。そしてそれは自分の最初の妊娠を夫に告げ知らせる巧妙な方法にもなっているわけだ。

(2) また別の友人は、その妻が最近ブラウスに乳のよごれのある夢をみたと書いた手紙をうけとった、と話した。これも妊娠通告の一種だが、ただし初産ではない場合である。若い母親は、最初の子どもの時にはじゅうぶん乳がでなかったから、こんどの子どもにはもっと乳がでるといいがと望んだのである。

しかし夢は、ノイローゼの場合とはちがって、すべて性的な内容をもっているわけではなく、また性的な欲動のエネルギーから発生するものとはかぎらない。飢餓やのどの渇きや排泄のはげしい欲求も、抑圧された性的な感動興奮と同じく、願望充足の夢をつくりだすことができるものなのだ<sup>(22)</sup>。

(3) ある若い朝寝坊なサラリーマン医師の夢。彼は病院の近くに下宿していた。下宿の主婦にいつも朝起してくれるように頼んで寝るのだったが、何時もうまくいくとはかぎらなかった。ある朝殊に気持よくねむっていたので、主婦によばれても起きようとはせず、反対に夢をみることによってますますはめになった。病院内の一室でベッドに自分がねむっている。頭のところにつるしてある名札をみると、某々、助手、22才と彼の名まえが書かれてあった。この男は「おやもう病院にきているのか」それなら出かけることもなかったと思って、寝返りをひとつうって更にねむり続け、

運刻することになったというのである。

(4) 塩気のつよいものを食べると、夜中に必ず咽喉のかわきのために眼をさます。しかし眼をさます前に、夢をみる。その内容は何時も同じなのだ。つまり水を飲んでいる夢だ。私はごくごくとつめたい水を飲む。そのおいしさといったらない。それからきまって眼をさますのである。そして今度は本式に水を飲むことになる。この夢の誘因は、眼をさました時もお感じている咽喉の渇きであることは自明である。この渇きという感覚から、水を飲みたいという願望が生ずる。そして夢はこの願望をみたしてくれることによって、ある機能に奉仕する。もし私が水を飲む夢で自分の渇きをしずめることに成功すれば、その渇きをみたすためにわざわざ眼をさますことはないはずである。しかし夢はあくまでも便宜なのだ。残念ながら夢で水を飲んでも、実際の渇きはいやされはしない。そのために眼がさめるのである。しかし夢のよき意志、ねむりつづけさせようとする意志は、不変である。

以上はきわめて単純な夢の例である。しかし複雑な夢、不可解にみえる夢も、すべてなりたちはこれと同じだといってよい。

フロイトはいう。「ねむるということの心的な前提は自我が睡眠の願望へと心構えすることであり、人生のあらゆる関心へのエネルギー配備をひっこめてしまうことにあるのである。同時に運動機構への通路は遮断されてしまうので、自我は抑圧のために用いていたエネルギーの消費を少くすることができる。つまりねむり休むのである<sup>(23)</sup>。」と。この抑圧作用が夜間にゆるめられることを利用して、折あらば浮びあがろうとして機会をうかがってきた、抑圧された無意識の願望興奮は夢の形をとってそろそろと意識にのぼってくるようになる。しかしかってそれを抑圧した人格、つまり自我の目的をあくまでも完遂しようとして働く抵抗の機能は、ねむっている間でも全く揚棄されてしまうというようなことはない。ただ低下せしめられるだけであって、その残りのものはいわば（夢の検閲官）としての権利をあくまでも放棄することではなく、つまり無意識的な願望興奮に対して、その本来のままの姿をとってあらわれることは禁止するのである。このねむってもなお存在しつづける夢の検閲のきびしさのために、潜在的な夢の思想（抑圧された願望興奮）は、やむをえず夢をまじめに問題としようとする人から非難されるような、夢の意味をわかりがたくしてしまうような改変や緩和をこころみなければならないことになる。これこそが顕在夢（表面に現われた夢そのもの）をきわだって奇妙なものとしている（夢のゆがみ）の説明なのである。すなわち夢というものはノイローゼの症状と同じようなメカニズム、すなわち現実の生活では人格の要求するところにしたがってやむをえず抑圧されなければならなかった欲動が、いまなお持ちつづける要求と、寝むっている間も現実を忘れきってしまえぬ人格側の検閲する抵抗の力との間に行われる妥協的産物なのである。したがって人格側の抵抗する圧力、つまり夢の検閲が強ければ強いほど、夢のゆがみもきわだったものとなるのであって、ノイローゼ症状の場合の抵抗の圧力と同じである。そしてノイローゼ症状が、抑圧されたものを、人格の前で弁護しつづけるいわば弁護人であったのと同じように、夢もまた、抑圧されたものが当然求める弁護の役割を果たしているといえよう。

ところで夢のねむりに対する機能は何か。夢に意味があるとすれば、それはまずそれをのせてい

るねむりに対してであるべきで、それは如何に説明さるべきか。これについては既に今までみてきたことから明々白々といえるであろう。夢現象はめざめるようにさせる外的、あるいは内的な刺激に対しては、これをある種の緩和作用によって防ぎ、それによってねむりがさまたげられるのを守りぬき、ねむりの願望をあくまでもとげさせようとする役目になっているとみることができる。まず外的な刺激に対しては、それを解釈しなおし、何かしら無害の状況の中にそれをおりこんでしまうというやり方で防ぐのである。たとえばすぐに後述する夢の中で、めざまし時計の音が、皿の割れる音に転化させられたように。また欲動のような内的な要求の刺激に対しては、ねむっている人は、これをそのままに放任しておき、潜在的な夢の思想（抑圧されたそのもの）が検閲のきづなをはなれないかぎり、夢を形成することによって充足される満足を許すことによって、かえってめざめさせないで、眠りの目的を果させようとするのである。しかしあまりに潜在的な夢思想が跳梁をほしいままにし、検閲の手を脱し、夢があまりにはっきりしてくる、つまり抑圧されたものの正体があまりにあからさまになると、驚いて検閲の機能は自己の本来の役目にたちもどり、めざめさせるのである。これは外的な刺激の場合も同じで、その刺激がおい払い、改造しても防ぐことができない程に強くなった時には、同じように夢の機能の拒否がおこり、夢は夢散し、驚いてめざめるのである。例をあげれば次のようになる<sup>(24)</sup>。

(1) ナポレオンⅠ世が仕掛け爆弾の爆発で夢から起された。彼は馬車の中でねむって夢をみていたのである。夢の中で彼は再びタリヤメントー河を涉って、オーストリア軍の砲撃を受けた。ナポレオンは「危なかった」と叫びつつ眼を覚ました（1865年の報告）というのである。

(2) 彼は病気で、寝ていた。そばに母親がいた。彼は革命当時の恐怖政治の夢をみていた。むごたらしい殺戮の場を眼前に見、最後には彼自身も白洲へ引張りだされた。そこにはロベスピエール、マラー、フーキエ・タンヴィル、その他、あの怖ろしい一時期の悲しい英雄たちがみんな揃っていて、彼が覚えていらなかった色々の突発事件があつてののち、有罪の宣告を下され、無数の群衆につきまとわれつつ刑場へ引きだされた。彼は断頭台に上る。刑吏が彼を板にしぼりつける。板がくると返る。ギロチンの刃が落ちる。彼は首が胴体から離れるのを感じて、怖ろしさのあまり眼をさました。すると——ベッドの板が落ちて、ちょうどギロチンの刃そのままに彼の頸椎にあたったことがわかった。というのである。

次の例は、日常のわれわれの生活にもっと身近なものといえよう<sup>(25)</sup>。

(3) 下働きのお手伝いさんが皿を幾枚も積み重ねて、廊下を食堂の方へ歩いていく。皿の塔は今にも倒れそうだ。「お気をつけ」と私は行ってやった。「下へおとすよ」と。むろん「なれていますから」とかというような返答がかえってきた。その間も私は歩いていく彼女を見守っていた。果せるかな！ 闕につまづいて皿はみんな落ち、大きな音をたてて粉微塵に砕けた。しかし——その音が何時までもつづく。これは皿の音ではない。「いや夢じゃないか。大したことはないはずだ。うっちやっておいていいはずだ。」という一方の声。しかしなおもその音は鳴りつづけて、やまない。何かがなっている音だ。——ついに目をさました。——むろんそれは皿の音ではなく、目覚まし時計のなっている音だったのである。

このような例は、われわれの身边にも、恐らくは枚挙にいとまがない程に存在するだろう。前述の咽喉の渇きの例も、内面的な欲求が、夢の中で遂に充足されえず、夢の機能が拒否された場合であった。そしてこのような単純で簡単な夢ばかりではなく、複雑で不条理で不可解にみえる夢の場合でもみな事情は同じなのであって、日常の生活では認められないようなさまざまな欲動や企図、刺激が、夢の中で改善され、夢の中だけで充足され、ねむりの目的が達成されるのである。そしてその改変が不可能になるほど強力になるやいなや夢の機能は拒否され、われわれは驚いてめざめるより他はないのである。

とにかく夢の機能は、夢の検閲の協力のもとに、もしありのままに表明されればめざめてしまわなければならない潜在的な思想（抑圧された願望）に独特の緩和作用を施し、これを無害な顕在的な夢の内容に改変して充足せしめることによって、ねむりの願望をまっとおさえることにあるといえよう。つまりわれわれは抑圧された願望を夢の中でさえ、そのままの形で充足させることはできないのである。何故ならばそれをそのままの形で充足させれば、われわれ自身の破滅になってしまうと、他ならぬわれわれ自身が無意識にしろ信じこんでいるのであるから、それがありのままの姿を現わせば、われわれ自身の破滅になってしまう。夢みるわれわれ自身がなくなってしまうことになる。これは大変なことだから、われわれはねむりからめざめなければならない、夢の進行をめざめることによって拒否しなければならなくなるのである。かといって抑圧された願望を常に抑圧されたままの形で保持しようと、瞬時も抵抗をゆるめようとしないならば、われわれは遂にねむることさえもできなくなってしまうだろう。いわば夢はこの両者を交替させながら、生を全うさせるために姿をあらわす緩和剤、調節機のような機能をもった存在だということができるのである。

以上みてきたことから明らかなように、ねむるということの心的前提は、人生のあらゆる関心へのエネルギー配備をひっこめて、ねむるという願望の達成へと心構えすることである。が、この睡眠状態がつくりだしたく思う刺激なき安静は、しかし三つの側面からたえず脅威をうけているともいえる。この三つの脅威とは、偶然的なものとしては、内外の刺激（たとえば騒音とか前述のめざまし時計のけたたましい音などがその例）と、断絶されえない昼への関心があげられる。そして不可避免的には、発現の機会をたえずねらってきた、抑圧された本能興奮（これは前述のようにノイローゼの時のように性的なものとはばかりはかぎらず、飢餓、渇き、排泄のはげしい欲求などもその役割をになう）があげられる。つまり夜分には（つまりねむると）抑圧が低下するから、外的あるいは内的刺激が、あの無意識的な本能源の一つと結合するたびに、何時も睡眠の安静は妨げられるという危険にさらされているといえる。したがって夢の機能は、この種の協同作業の産物を、無害な幻覚的体験に示たてあげることによって、睡眠を持続させることのなかにあるのである。時々その夢がゆきずまってかえってわれわれをめざめさすのは、夢の機能に反するように思われるが、これは夢が好んでするのではなく、心ならずもその機能を放棄しなければならない、危険が近づいたことを知らせる信号のようなものというべきである。その証拠にそのような時に直面しながらも、なおわれわれをねむりにつづけさせようとして、「今おきていることは夢ではないか」「夢の中でできごとにすぎぬではないか」という至極もっともなさやきをききつづけることがあるではないか。

ところでここで昼への関心という耳なれない言葉が使われたが、夢の分析をつづけていくと、潜在的な夢の思想の中には、すぐ了解でき、しかも夢みる人にもよく知られているものとはきわだって区別されるひとつの夢の思想がある。つまりわれわれには理解しがたいという印象を強くうけるものであるが、それらはきまってめざめていた時、すなわち意識的な昼の生活でも、意識しようと思えば、意識しえたはずなのであるが、その多くは何らかの事情からきまって注意を払われず、したがって一見重要でないもので意識されえないでいたものからなりたっているのである。これこそフロイトのいわゆるめざめている生活の残りもの、すなわち昼への関心とよばれるものなのである。しかし夢思想の本筋は、われわれには非常にいやな、異様なものであり、したがって奇異に感じたり、あるいは憤激して否定しなければ身がもたぬような願望興奮からなりたっているといわねばならぬ。この願望興奮こそが夢の形成者なのであって、夢を形成するエネルギーを供給しているものであり、これがくだんの昼の残りものを夢の資料としてとりこんで利用し、夢の作業をおしすすめていく原動力なのである。

いいかえれば、夢形成の可能な前提条件は、まず第一にわれわれが固有の願望衝動と固有の表現様式と、ふだんは効力をあらわさないが折あらば表面に出てこようとすきをねらっている、独特の心的メカニズムを具えた特殊な心の国、つまり抑圧された無意識の世界を所有しているということである。(しかしこれを実際に所有していない人などはいない。)そして第二の条件としては、めざめている間はたえずこの無意識的なものを押しつづけている、あの抵抗の力が他ならぬねむることによって低下するということである。つまり第一のものは、今や第二の条件の発生によって(すなわちねむることによって)活気づく内外の刺激の発生を待って(これらは誘因としての働きをするのだろう)、昼の残りものに感情を転移し、これらを自己のうちにとりこみ、ある表現をとることによって、夢の中でいわばゆがめられた願望充足をこころみることになるのである。こうして発生する夢は、すでに妥協的形成物であるが、それは二重の機能をもっているともいえる。すなわち一方では、ねむりを妨げる刺激を除去することによってねむりたいという願望に役だつから、ねむる自我に奉仕しているといえる。他方それは抑圧された願望興奮に、幻覚的充足という満足を与えることによって奉仕するのである。このさい第一のものの直接の願望充足はゆがめられることになるが(これがたいいの夢の内容を不可解なものにさせている)、ゆがめているものは、抑圧抵抗の張本人、いわずとした自我(今は夢の検閲官として現われる)の働きであるが、第一のものはその検閲をうけることによって彼の顔をたて、たとえゆがめられたものにせよ、今や心ゆくまで願望の充足をはかろうとするのである。むろん自我はきずつきやすくもたよりない弱者ではあるが(それ故にこそまた抑圧と抵抗の仕事を自己の持分として後生大事と守っている)、それ故にこそまたそれだけ彼の顔をたててやる必要があることは、われわれの現実の社会生活のなりたちからも容易に想像できよう。何故ならば今は睡眠の願望達成、ねむりの持続が至上命令であるから。第一のものがあまりに傍若無人に心ゆくまで願望を達成しようと猛威をふるい、自我の持分をおかす程、つまり人格の要求に反する程までに高まるやいなや、ねむっている自我は危険を感じて、夢みることを中断し、驚いてめざめ、第一のものの願望充足の道はたちまちとぎされてしまうだろうから。つ

まり夢はあくまでも第一のものとこれを押しつづけてきたものとの妥協の産物なのである。

以上のように夢は、ねむりとともに弱まる抑圧、抵抗の働きを足場に、現実の意識生活から由来するいわば昼の残りもの——それはめざめていた時、すなわち意識生活でも、意識しようと思えば意識しえたはずのものであるが、奇妙なことには、その多くは何らかの事情からきまって注意を払われず、意識されえないでいたものからなりたっている——が、あの無意識の国にしまいこまれているものから出てくる本能的興奮といっしょになって形成されるものである。と同時に、それはまた弱まった抑圧・抵抗に対する抑圧された過去の願望興奮のひそかな挑戦であり、かくれた願望充足ということもできる。フロイトは夢の検閲の協力のもとに潜在的思想（抑圧された願望）を顕在的な夢の内容（表面にあらわれるゆがめられた願望充足のすじみち）にまで運んでいく過程を夢の仕事となづけた。が、この仕事は昼の間には意識されなかった、したがって潜在していたいわゆる昼の残りもの、つまり潜在的となっている（これを前意識という）思考資料を独特に処理し、その構成分子を圧縮したり、心理的にアクセントのおかれる部分をつくったり、思想の全体を視覚的像に変換、戯曲化し、更に誤解を起させるような第二次加工によって、その仕事の仕あげをしたりするのである。この夢の過程は、われわれの知っている思考過程とは著しくちがっており、ノイローゼの症状と同じようなメカニズムによって形成されるから、同じように難解であり、同じように解釈をどうしても必要とするものなのである。したがってまたこの解釈に成功すれば、われわれの心的生活のいっそう深い所で進行する、われわれの心の秘密の層の幾分かを知りえたことにもなるのである。つまり分析は夢を二方向に利用していくのであって、分析をうけるものの昼の間に進行しながら、今はまだ他ならぬ本人が気がついていない心の過程、ならびにいわずとした無意識的な一番奥の世界を知るために利用するのである。すなわち、今は顕在夢が代理している、多かれ少かれ感情をおびた潜在的思想の中には、分析をつづけていくと、ある区別があることがわれわれの注意をひくようになる。これらの潜在思想の殆んどすべてはその夢をみた本人によって、やがては今回あるいは別の時にあるいはそう考えた、あるいはそう考えないともかぎらなかつたろうと認容され承認されうるのである。がしかしその中でたった一つ思想だけ——それは寄異であり、恐らくは不快である——は認めることにさからい、激しく興奮してはねつけられるだろう。つまり分析をつづけていくうちに前者が、覚醒時の生活、つまり昼の間に思考されえたものの残りであり、ここでいう昼の残りものであることが解ってくる。そして後者が夢みた本人の無意識に属するものであることも解ってくる。そのためにこそ後者は激しく否認され、拒否されたのである。それは夜間における抑圧の低下を待たなくては、表現の方式をみつけないことのできない夜の子ともいえるのであって、これがあるが故にまた夢は今息吹きをえたのである。しかしまた逆にもし前者すなわち争う余地のない昼の残りものと結合されることがなかったならば、この無意識的な興奮も、めだたない変装をして夢の検閲をのがれて、心ゆくまでゆがめられた充足を求めつづけること、つまり夢自身も形成されることはできなかったのである。

ともあれ、したがって夢によっては、小児期の生活についての忘れられてしまっている資料を手に入れるという便宜が与えられることもある。つまり夢はここでは、催眠術がかつてうけおってい

た仕事の一部を果すことにもなるのである。しかしだからといって夢というものがすべて性的な内容をもつものであるとか、あるいは性的な欲動のエネルギーに帰せられると考えてはならない。飢餓とかのどの渇きや排泄のはげしい欲求も、抑圧された性的な感動興奮と同じように、それが充足されたような夢をつくりだすことは既に多くの例でみてきたところである。

以上夢を解釈すると解ることであるが、一面においてはそれは抑圧された願望の充足ということであるが、他面には昼の間の潜在的な思考活動をそれによってつづけ、またそれを好むがままの内容でみたしたということになり、ある計画、ある警告、ある考慮あるいはある願望の充足をもまた表現しているということになる。したがって分析は、この夢を二方向に利用し、これによって被分析者の現実の生活で進行している心的過程と無意識的となっている過去の心的過程とを二つながらに知ることができるようになるわけである。次にそのありようを実際の夢でみてみよう<sup>(26)</sup>。

ある若い、だが若いわりには結婚歴の長い婦人の夢。

(顕在夢)——彼女は夫とある劇場に腰かけていた。平土間の片側はがらあきだった。夫は彼女に、L嬢とのその許婚者もきたいといっていたんだが、不幸にも150円で三つの席という感心せぬ座席しか残っていなかったの、席をとるわけにはいかなかったのだと話した。ところで彼女の方は、その時それはちっとも不運なことではなかったと思った。というのである。

ところでこの夢は先日のできごと(つまり昼の残りもの)をふんだんに利用していた。

(彼女の証言)——夫は前日、彼女とはほぼ同じ年配の知人であるL嬢が、婚約中であることを彼女に告げていた。(夢はこのニュースに対する反応であったといえる。)次に平土間の片側ががらあきだったということは、前週実際にあったできごとをほのめかすものであった。彼女はある芝居を見にいこうと考え、手まわしよくきっぷを買うことにした。が、あまりに早かったので当然のことながら予約料を余分に払わねばならなかった。ところが劇場へ行ってみるとそんな心配が余計だったことがすぐわかった。平土間の片側は殆んどからっぽだったからである。夫はそれからというもの面白がって彼女の苦労症ぶりをからかいつづけているのであった。次に150円というのは何処からでてきたのか。やはり前日のできごとで、夫の妹が夫からの贈物として15,000円をもらったが、別に急ぐこともないだろうに、この愚かな女はお金をもらうやいなや、宝石店にかけこんである装飾品を買うということがあったのである。最後に「三つ」というのは？ これについては彼女は何も知らないというのだったが、今度結婚することになっている他ならぬL嬢は、約10年も前から結婚している彼女よりも、僅か3ヶ月しか年下でないという事実が、彼女との会話からでてきた。それにしても、結局劇場にきたのは2人でしかなかったのに、3枚のきっぷをかうということは馬鹿げたことのように思える。しかしこれについては彼女は何も答えず、それから先というもの、思いつきをいうことを拒否してしまった。しかしそれにもかかわらず彼女の提出したこれだけの材料で、そこから夢の潜在思想をおしあてるにじゆうぶんだとフロイトはいう。夢のきっかけとなったものは、夢の顕現内容の中で諷刺されるからである。

(解釈)——まず注目される点は彼女の提出したものの中で、時を規定するものが数回でており、それには一貫した意味がこめられているように思われることである。彼女は芝居の入場券のことを



あまりに早く心配しすぎ、それを早まって買った為に、余計に払わなければならなかった。また義妹も同じように事を急ぎ、遅くなることをおそれるようにお金を装飾店にとどけている。ここに強調されている「あまりに早く」、「早まって」ということに、三ヶ月しか年下でない女友だちが今や有能な夫を得ようとしているというニュースと、義妹に対する軽蔑の中で表現されている「そんなに急いでお金を使うことはない」という批評をつけ加えれば、その中に表現をみつけたそうとしたものの意味はあまりに明白といえるのではないか。「結婚をあんなに急いだ（それにしても彼女よりも10年も早く結婚するとはあまりに早すぎた）自分は義妹におとらず馬鹿だった！ L嬢の例で明らかのように、もっと待っていればずっとよい夫を持てたろうから」という物騒ともいえる表白となろう。

ところで「150 円で3枚」という謎めいた3は、実際は男を意味する象徴であった。したがって顕在要素は、男を持参金で買う、「お金をだせば百倍もいい夫が買えただろうに」（15,000 円は150 円の100 倍である。）つまり、「私の持参金をもってすれば100 倍もいい夫を買うことができたのに」となるだろう。結婚は明らかに「劇場に行く」ことによって代理されている。「あまりに早く入場券を買いすぎる」は「あまりに早く結婚しすぎる」に代っているのである。この代理作用はむしろ願望充足のしわざとみてとることができる。うぶな素人娘たちは婚約がすむと、もうすぐ今まで禁じられていた出し物を見に劇場へ行って、一緒に見物してもいいのだという喜びをしきりにもらすものだそうである。ここにいう見たいという好奇心は、最初は特に両親を主体とした性生活に向けられた性的好奇心であるが、それが強い動機となって、やがて娘たちを早い結婚に急がせるものである。こうして観劇は結婚しているということの、きわめてありふれた暗示代理となるわけである。

彼女はむしろ以上の解釈を承認するが、その解釈に驚いていることも事実である。彼女は夫をそんなに軽蔑しているとは知らなかったし、なぜ夫をそんなに軽蔑せねばならぬかも知らないのである。しかしこの夢みた婦人は、昼間友人の婚約の話を聞いた時程に実際には夫に不満だったわけではない。それどころか彼女は結婚当時夫との結婚を誇らしくも思い、他ならぬL嬢よりも自分の方がめぐまれていると感じもしたのである。つまり私は劇場へ行って、今まで禁じられていたものを何でも見物してもよいが、あなたはまだいけないのだ。あなたは待たなくてはならないのだという優越表白だったわけである。ところが現在の局面は逆になり、昔の勝利は現在の敗北によってかわられている。さきの好奇心の満足は、自己中心の競争心満足とごっちゃになり、顕在夢の内容を規定していく。実際、自分は劇場に腰をおろしているが、友だちは入場できなかったことになっている。つまり不運ではなかったのだ。

ところで昼の間に聞いたホットニュースは、この好奇心をよびますきっかけを与えたのではなく、単に憤懣と後悔の念をよび起すきっかけを与えたにすぎない。自分が結婚をあんなに急いだことに対する憤懣。夫に対する軽蔑、すなわちL嬢のように待っていさえしたら、もっといい夫がえられたらという後悔の念。これらのものはそれ自体では夢をみる資格のないものである。これらの昼の残りものは、常にある無意識的願望の助けをかりて、その志向を昔の表現法に解釈し、こ

これらの願望を充足せんがために変形するのである。願望充足という一方の性格はコンスタントであるが、他方の性格はいろいろに変わるであろう。この性格もそれ自身はある願望なのであるから夢は昼の潜在的願望を、ある無意識的願望の助けをかりて、充足されたものとして表現するといえる。

このように夢は、現実の生活でのかくされた意図と、遠い過去で抑圧されなければならなかった願望興奮とを表現していることになるわけである。したがって夢によっては、小児期の生活についての忘れられてしまっている資料も手にいれることができるのであり、夢はこの場合以前には催眠術に課されていたものの一部をなしとげるものとして利用もされることにもなるのである。

ともあれ、精神分析はノイローゼ症状の治療から出発し、ノイローゼ形成のメカニズムを正常な人間なら誰でもが日常経験している夢の解釈にあてはめることによって、まずその効果を不動なものとしたといえる。すなわちわれわれ正常人の心理にもノイローゼ患者と同じようにわれわれ自身には意識されえない無意識的な過程が存在すること、そしてそれこそが夢みるわれわれを存在せしめている根本的な要因であること、抑圧された無意識的な過程はわれわれの知らぬところで、われわれの心的生活に少なからず影響を及ぼしていること、そして遂には意識にまで達するような作用をも及ぼす、決して無視してはおれぬ心的過程であるという有力な証拠を提出することになったのである。

ところでノイローゼと夢の形成メカニズムを解明することによって、これらの現象が実は抑圧された無意識的なものから発生していることを認識せしめたフロイトは、更にすすんでこのメカニズムを正常な人間が日常生活の中でしばしばおかすささいな間違いや症候行為の研究にも適用する。そしてそれによって、もはや無意識の影響が日常茶飯のできごとであり、それを想定してかからなければ人間の心理を理解するなどということは到底できないこと、人間の精神生活は、意識的なものと無意識的なものがおこなされて常に展開しているものであることを、確信をもって唱道することとなった。次にそれについて少々ふれておかねばならない。

#### ⑨ 失錯行為の解明

フロイトは人間の行為において、無意識の想定が必然的であり、完全に正当であるという証拠を、日常生活のわれわれのささいな失錯行為からいろいろとひろいあげて指摘する。ところでここで証拠としてとりあげられているものの多くは、フロイトによればほんの一時的なできごとであり、人間の生活にとってはそれ程意義あるものとは思われなかったが故に、重要でない瑣末な、泡末のごときものとして打ちすてられ、注意を払われる光榮に浴さないできたものであった。しかし人間の日常生活にその時は重要な意味や、眼に見える影響を与えないからという理由だけで注意を払われなかったことが、後になって重要な意味をもってくることはよくあることである。ささいな故意の不注意が、ごく微かな徴候を通してしかあらわれない非常に重要な事柄に正当に関与できるはずのチャンスを自らつみとるような結果をきたすことは少くないのである。ちょうど林檎の木から一個の林檎が落ちるべくして落ちたという、人類がその長い歴史の間にたえず経験してきた、とるに足りないできごととに長い間正当な注意を払うことができなかったことが、あの地球に引力があるとい

う重大な発見をふと見逃してきたたった一つの理由であったように。とにかくそれを無視したところで正常な人間の意義ある生活に確たる影響がないということが、事の重大性や、意義を判断させる唯一のよりどころとなつてはならないことをわれわれは知らねばならぬ。自然のたわごとか、運命のたわむれとして夢やノイローゼの解釈を怠ったことが、人間の心理の正当な解釈を妨げてきたように、非常に地味な労作からでも大問題の研究に入っていけるかも知れないのだから、ささいなできごと、微少な日常生活の意味なきつまづきなどといって軽蔑し、軽視することなかれと、フロイトは警告してやまぬのである。

フロイトがここでわれわれの日常生活で非常に頻繁に起り、誰でもがよく知っていることではあるが、それにどんな価値があるかあまり知られていないが故に注意を払われないできたところのものというのは、簡単に分類すれば次の三つにわけられる。まず誰でもが何かを言おうとしてそれとは違った言葉を言ってしまう場合の言い違い、また書く場合の同様の書き違い、あるいは印刷物や書き物でそこに実際にある字とは違って読む場合の読み違い、同様に自分にむかっていわれたことを誤って聞く場合の聞き違いなどが分類される。(そのさいもちろん、言語器官や視聴覚器官など有機的な障害からくるものは度外視していることはいうまでもないことである。) フロイトがその次に分類している失錯行為の系列には、永久にはなく、ほんの一時的なたとえばふだんはよく覚えていたはずのあるなまえが思いだせないとか、あとでは思いだすはずのある企てを実行することを忘れるとか、つまりある瞬間だけ忘れてしまっているような忘却が基盤となっている系列の失錯行為があげられる。そして第三の失錯行為には、第二の系列の特徴であるほんの一時的という条件の落ちている忘却があげられる。たとえばある物を何処かにしまったままでは見つけだせない場合の置き忘れだの、それと全く類似した紛失などであり、これにはある種の過失がともなっているが、その過失の前後にはそれが違っていることを知っているのに、暫時の間はそう思いこまねばならぬ失錯行為の系列である。

これらのことはみなわれわれの日常生活で、われわれの誰でもが常に経験しているできごとであるが、われわれの日常生活に大した障害を与えないできたが故に意味を持ちえず打ちすてられ、そのままにすまされてきたものである。ただ稀にはあるが、物の紛失のようなことは、実際上ある種の重大な障害をその人の生活に対して与えることがある。が、しかしそれ以外ではこうしたことは誰にでも起ることであり、多くはさまつなことであるから、失錯行為の頻発がその人のもうろうくの徴候や証拠ではないかと心配されるぐらいのことで、むしろ同情や微笑をもってお互いをゆるしあう約束になっているかのようにみえるのである。失錯行為の頻発がもうろうくの証拠であるか、原因であるかは別として、このような考え方の背後には、失錯行為の原因が多くの場合有機的障害や生理的な注意障害にあると考えられ、主として生理的な原因からよって起る結果であると考えられてきたことを示している。確かに気分が悪く疲れている時や、のぼせている時、他のことに忙殺され心身ともに疲れている場合、注意力が散漫となり、この種の失錯行為が派生し、頻発しやすいというのは必ずしも当をえていない推理どころか、はなはだありそうなことにも思える。したがって昔の人がそのように処理してきたことは無理のないところで、ある種の生活のちえであったと。

いえるかもしれない。しかし経験や観察の教えるところによると、かような失錯行為や忘却は、疲れても放心しても、興奮してもいないどころか、かえって注意力を集中している、まともで正常な状態にある人にかえってひんぱんに起りうるという事実を指摘することは、さほどむづかしいことではないのである。だから人間の行為はそれにむけられた注意力の増大によって保障され、注意の低減によってそこなわれるというような単純な公式によっては解明されえないのであって、全く自動的に非常に僅かな注意力を以て行われているにもかかわらず、極めて確実に成就される仕事はたくさんある。むしろ多数の仕事は、たとえば大いなる練習によって全く自動的に弾けるようになっている熟練したピアニストの名手のように、特に高い注意力を必要としない場合によほど確かなできばえになり、失錯行為の不運は、仕事がかうまくいくようにと特に念をいれている場合、つまりそれに必要な注意がちっとも他にそれないようによほどよく統制されている場合にこそ、かえって生ずるという事実をわれわれはよく知っているのである、その場合にも、それこそまさに興奮や緊張の結果だということかも知れないが、それならばなぜその興奮や緊張が、むしろますます多く注意を向けることにならないで、かえって失錯行為を誘発することになるのか、われわれには理解することができないといわねばならない。

フロイトのいうように誰かがある大事な演説や談判で、言い違いのために、まさに言おうと思っていることとは反対のことを言って不思議に思ったり、しかもその失敗が何故他の場面ではなく、他でもないこの重大な場面で発生しなければならなかったのかと腹だたしく思ったりするのは、精神生理学的理論や注意の理論だけによってはどうにも説明しつくすことができないのではないか。すなわちここには何かの説明が、それもかなり重要な部分の説明が落ちている、欠けていると思わないわけにはいかないのである。

次にフロイトの分類にしたがって簡単な例をあげよう。

第一の系列の言いちがえの場合<sup>(27)</sup>—— ドイツ帝国議会で、ある時衆議院議長がまさに開会を宣すべきところを「諸君、私は議員諸君のご出席を確認致しまして、ここに閉会を宣します」とい

いちがえて、当然のことながら物議をかもし原因をつくったというのである。

第二系列の一時的な忘却の場合<sup>(28)</sup>—— Yなる人がある時、ある婦人に首ったけになったが効を奏さず、その婦人はその後まもなくXなる人と結婚してしまうことによって、このロマンスも幕がおりることになった。しかも少くとも外見上は、その婦人の結婚生活は幸福らしい。ところで話が相前後するが、Y氏はその婦人の夫となったX氏をその前から、既に長い間識っていたばかりではなく、重要な取引先の主人でもあった。ところが彼にとってこのロマンスが不幸な結末をみてからというもの、X氏のなまえを思いださなければならない場面に遭遇するたびにきまってそのなまえを忘れてしまっていることに気づき、Y氏は不本意ながら何時も他の人に聞いてX氏のなまえを思いださなければならないしまつとなってしまうのである。Y氏の記憶力は人なみ以上によかったが、何故かX氏の場合だけは記憶力が減退するかのようである。

第三の系列の忘却の場合<sup>(29)</sup>——〈ある若い夫の告白〉 この若い夫婦の間には、2, 3年前にふとしたことから誤解が生じ、夫は若い妻の優れた性質を認めるにやぶさかではなかったが、若い妻

があまりに冷い女だと感じ、それ以来お互いに愛情なしにくらしていたのである。ある日のこと妻は夫がきっと面白く思うにちがいないと思われる本をみつけたので、わざわざ夫のためにその本を買ってきたのである。むろん紳士である若い夫は、この妻の親切のしるしに感謝し、それを読むことを約束したうえで、置くべき場所に置いたはずであったが、その後二度とこの本におめにかかることができず、長い間妻との約束を果しえないままで過ごさねばならなくなった。こうして月日はいたずらに過ぎたが、若い夫はその間も折にふれてこの所在不明となった書物のことを思い出し、実際またそれを見つけたそうと試みもしたが、そのたびにきまってだめなのであった。約半年ほどたってからのこと、別居してくらしていた夫の母が病気になる、妻は当然の如く家をでて姑の看護に行かねばならなくなった。病人の様態はかなりの重態だったので、偶然にも妻は彼女の最もいい面を、すなわち冷い女ではなく、実は暖い女であるというあかしをしめす機会をうることになったのである。夫は妻の働きに感激し、感謝の念を胸いっぱい抱いてある夕方帰宅した。彼は机に歩みより、何の気なしに、但し催眠状態でのような確かさをもって、ある特定の抽斗をあけると、その中の一番上のところに、あれほど長い間行方不明となっていた書物、すなわち置き忘れていた書物をいとも容易に見つけたすことができたというのである。

ここにとりだされた三つのタイプの失錯行為とよばれるものは、むろん説明の便宜をも考えて都合よくとりだされたものであるが、フロイト自身が実際に見聞したものである。そしてフロイトのいうごとくわれわれの日常生活でも決してありえないことではなく、むしろ大いにありそうなことだということができよう。しかもこれらの行為はフロイト以前ではともに注意散漫などの生理的理由から生れる、偶然の失錯として取り扱われ、科学的解明のらち外にはみだしていたものであった。フロイトはそれを殊更にここにとりあげ、決して偶然のできごとや、もうろくのしるしなどではなく、まちががなく正当な意味をもっている必然のできごとである。しかもその意味は他ならぬその行為自身に附属しているものから出ており、容易に推察し、確認されもしうると主張しているのである。

たとえば第一の例の場合、意図されたものとはまさに正反対の言葉が口からとびだすことになったが、しかし考えてみればそれこそが彼の本当の意図、潜在しつつづけていたかくされた意図であったのである。ただそれがひよんな時に現われでなければならなかったばかりに物議をかもすことになったにすぎない。しかしむろん後で問いただされた衆議院議長の口からは「開会というべきところを、偶然まちがえてしまった。疲れていたし、他の事に気をとられていたために頭が混乱して、開会というところを反対に閉会と行ってしまった。まことに不徳の致すところですよ。」といったような常套的な返答が返ってくるはずであろう。老練な政治家ならば、「自分はこれから開く会議に何らよいことを期待しておらず、ないないうんざりしていた。ありうることなら直ちに閉会されることを望んでいたから、開会というべきところを思わず正直に閉会と行ってしまったのだ。」などとまさに正直に告白してみせることなどは、よほどほぞをかためた場合の他はおめにかかることはできないであろう。それどころかこのような場合、自分自身すら、この潜在していた心内の意図を知らないことが多いのであり、多くの場合、このかくされた意図は、強い妨害にあって浮びあがっ

てくることを拒否されているのである。そこにこの過程の解釈が、長い間煙幕の中に閉じこめていた理由をわれわれは見つけだすはずである。

つまりこの場合の失錯行為の意味は、両立しがたい二つの志向——二つの相反する意図の葛藤の表現であり、「予は会議の開会を宜するも、むしろ既に閉会されてあらんことを望むものなり」というのが、議長の失錯行為のかくされた真意であるということが出来る。——むろんその場合、前述のように閉会されてあらんことを望む志向は、本人に意識されていることもされていないこともあることはいうまでもないことで、多くの場合、その指摘をうけると本人はやっきとなってそれを打ち消すことに努力するのがおちである。それこそがこの失錯行為の意味を、不明朗な姿で温存させてきた理由であったということが出来るのである。したがってこの場合議長の口にせざるをえなかった不徳のせいという言葉は、むしろ注意散漫という常套語の背後にかくされている、他ならぬこの自分が主催する会議をなおざりに考えてきた自分自身の不徳義漢ぶりに対する無意識の釈明とみなす方が、より当をえた処置というべきなのである。

以上のように第一の場合は意図されたこととは反対のことを口にだし、これによって他方の意図を完全に代理している場合であるが、第二、第三の例は当然覚えていなければならぬなまえや本の置き場所を思いだそととする意図が、思いださせまいとするもう一つの意図の抵抗にあって、妨害されている場合で、そのために思いだせないでいる例である。Y氏は明らかに幸福な恋仇を相手にしたくない。「あいつのことなんか覚えていられるか、忘れてしまえ」というわけで、実際にはどうかは解らないが彼からみればにくらしい程幸福にみえるその配偶者のなまえを思いださなければならなくなると、何時もきまって忘れていくというわけである。第三の例においては、この間の事情は更に明らかなものとなろう。置き忘れていなければならぬ動機、志向（妻のつめたさについての評価）が消失すると、いとも簡単に忘却の事実も消失してしまったのだから。そしてこの第二、第三の場合も一方の意図、志向が本人に意識されている場合もない場合もあることも、第一の場合と同じである。そして多くの場合そのかくされた志向を指摘される時、とんでもない私がそんな志向を持つはずがないと頭から否定するか、時には絶交の原因というような深刻な結果を生むことがあるのもまたすべて同じだといわなければならない。つまりその事実の承認が彼の人格の評価を低下せしめたり、時には失脚の原因となったりしかねないと信じられているからである。

以上みてきたことからいえることは、失錯行為が決して偶然のいたづら行為などではなく、ある意味をもった心的行為であり、むしろきまって相異なる二つの志向の葛藤、干渉の結果から生れてくる意味深長な行為であるということである。むろん言い違いや書き違い、読み違いなどのなかには、指摘されてきたように、純粹に生理的な根拠から現われるものもなきにしもあらずかも知れない。それをもすべて否定しようというのではないが、たとえば書いたものを読み違える場合など、よく似た字や言葉を読みまちがえて読みすごすことは決して少なくない。特にまちがえて読んでもそれで意味が通る場合、あるいは疲れている時、気が散っている時などこの読み違いが日常茶飲に起りそのままにすまされてしまうことが多いように思われる。しかしこれも字が似ている、疲れている、気が散っているなどということは、読み違いを起しやすい条件ではあろう。しかし読み違いを起さ

せる根本的な原因とみなすことはできない。今一步ゆずって失錯行為のひとつひとつがみなかならずしも意味深長な心的行為ではないと認めるとしてもしかし、忘却にもとづく種類の失錯行為（なまえやある企ての忘却、置き忘れなど）の場合には、生理的な根拠だけから生ずるとは信じられない場合が非常に多いこと、そして恐らくは何らかのかくされた意図の故に起る紛失はきまって実在するということも認めないわけにはいかないのである。日常生活で起る過失は、一般にただある種の部分までだけがわれわれの観点に支配されているに過ぎない、つまり一部分だけが表面に現われ意識され認知されるだけだから、ちょっとみには、どうしても偶然のできごとと思われ、原因ありとすれば疲れや注意散漫に帰せられる他はなかった。またそうすることによって万事平穩にすませうとならば結構だということになっていたものと思われるのである。しかしよく観察し、その背後関係をたどっていくと、他ならぬこの失錯行為が他の場面ではなく、他ならぬこの場面で起らなければならなかったからには、この表面にあらわれ出た失錯行為の背後にはかくかくしかじかの志向がかくされていて、それが他ならぬこの場面をかりて一半の意図を達成したのが、他ならぬこの失錯行為であったのだと認めないわけにはいかなくなるのである。つまり失錯行為は、われわれの観点に支配されていない、意識に気づかれていない（かつて意識されていたとしても、また時には失錯行為の直前に意識されることもあるが多くは）無意識的な意図の干渉によって起ることを認めないわけにはいかなくなるのである。

今ここで多数の例をあげていちいち吟味してみるだけの紙数はないが、しかし前述の簡単な例からさえ、意識される志向はむろんのこと、他ならぬいい手自身、当事者自身によって頑強にそんな志向をかって持ったことはない、持つはずがないとまさに忌むべきことのように否認され、拒否されるような志向すらが、当事者の意図に反して現実の生活の中でまちがいにひょんな時に顔をだす。そして言い違えや忘却の行為を起し、われわれを悩ますものであるらしいことに気がつき愕然とせざるをえないというのが、偽りない実情なのではあるまいか。むろんこの事実をきれいさっぱりと認めることはなかなか困難なことではあろう。なぜならばこれまで殆んど動かすべからざる確信のもとに、これだけは頼りうるもの、誇りうるものとして信じていた、この最後のとりでたるわれわれ自身（自我）なるものが、実はそのわれわれ自身が意識しえないでいるもの、知らないもの、つまり無意識的なものによって重大な影響をたえずうけてきたのである。しかもこれからもずっと受けつづけるのであり、それについては今後もまさしく乏しい報告しかえられず、甚だ頼りない生き方をしているにすぎない、いわばあわれな存在であることを認めなければならないのであるから。（それはわれわれ自身のことではあるが、やはり同情に値することだといわねばならぬ。）

以上を要約すると、何ごとかをいおうとしたり、何ごとかを思いだしたくない現存、既存の意図が、言い違えや忘却の起る不可欠の条件である。そしてこれらの志向は他方の志向を妨害することによって顔をだそうとするために、かつてその遂行にある種の抑制をうけたに相違ない。ある種の妨害する意向はそれが妨害する意向となる前に、それ自身あらかじめ妨害せられたに相違ないが故に、今また折あらば顔をだそうとすきをねらっていたその意向が、その恰好の遂行の場所をみつけて顔をだし復讐をこころみたのだといわざるをえないのである。ということになれば、われわれの

日常生活で不断に起りつつあるささいな過失——それはささいにみえるが時と場所によっては本人にとって全く重大な結果を及ぼすこともあるらしいのだが——言い違いや読み違いなどもかって抑圧されたものが、他ならぬ抑圧したものの抵抗のメカニズムの弱体の故に（この場合不自然なきんちょうとか言葉の類似などがそれを起りやすく条件づける）顔をだしたものである。また忘却もかって抑圧されたものが抵抗のメカニズムによってまちがった通路を通して顔をだしたに相違なく、全く夢やノイローゼ症状形成の過程と同じなりたちのものであることが理解されるのである。特に第三の例の場合など、抑圧の動機の消失とともに、置き忘れの症状すらもきれいさっぱりと幸福な結末がついてしまったことを思えば、この確信はいやがうえに確固たるものとなるといえよう。

このようにしてわれわれは次のような事実を知る。生れつきの病氣あるいは生理的な欠かんが原因なるが故に、正常人には無関係な異常の現象として解されてきたノイローゼ症状。自我が自らの意志によって身をひっこめてしまう睡眠中に起る現象なるが故に、正常な心理のあづかり知らぬいわば自然のたわむれ、あるいはある種のけいれん現象の如く解されてきたかの不可思議な夢現象。そして日常生活でひんぱんに起る現象ではあるが、ささいなできごとであり、そのように解することが平穩無事な生活を維持する手段として好都合であったから、偶然のできごとか生理的なたわむれ現象とされてきたこの失錯行為。この一見無関係にみえる三つの現象が実は共通の基盤にたち、共通のメカニズムによって形成される現象であり、したがってそれはまた、決して偶然のいたずらや生理的な異常現象などではなく、われわれの心的生活に固有な基本的形式の上にまちがいなくたっている、心理現象のひとつに過ぎないことを知るのである。つまりこの正常なるものと自負しているわれわれも、夢や失錯行為を共有しているのだから、何時とはなくノイローゼにかかわりをもちうるのであり、ノイローゼも決して正常なわれわれと別世界に起っているできごとではないということである。ということは、無意識的なものが、意識に劣らずいや確かに意識以上にわれわれの心的生活の重要な部分をしめているということでもある。

ところでこの無意識的な心的過程というものが、何もむつかしい特別の心的過程なのではなく、むしろわれわれにとってより身近かなもの、われわれの日常生活にはなはだかかわりをもつ普通一般の過程であるという証拠を、次にもう一つだけあげておこうと思う。

## ② 症 候 行 為

ここであげるものは、今まであげてきたものよりも、更にささいな行為であるが故に、もはや失錯行為という名を与えるのさえふさわしくないほどめだたない行為であるが、しかし失錯行為にはなはだ似た行為でもある。つまり失錯行為に似てちょっとみたところやはり動機のないもの、めだたないもの、したがって重要でないものという性格があるうえに加えて、余計なさづかりものという性質があるために、偶然のいたずらとか自然のちょっとしたたわむれ、それも人生をいろどる余計なあや模様のようにみなされ、ご愛嬌として真面目にはとりあつかわれないうるものである。そのうえこれらの行為のなかのかなりの部分は本人にとってはいかにも情ない、不必要なかざりものと考えられ、なくもがなと思われてきたから、なおさら粗末に扱われることになってしまったと



いえる。そしてこれらの行為が前述の失錯行為と一見似ていながら違ってみえる点は、衝突し妨害をうける他方の意向が脱落しているようにみえる点であり、またこれらの行為には限界がなく、われわれが情意運動の表現方式のひとつに数える無器用な身振り運動の方へと移っていく点である。これらの行為の中には、何でもなくちょっと服装を整えたり、頭に手をやったり、指をキュキュならしたり、手近な物品を何気なしにいじくったり一見無目的なすべての動作、及びそれらの動作を中止したり、制止したりする動作、それから故意ではなく独り口ずさむメロディなどなどまでがあげられよう。これらの現象も実はすべて意味あるものであり、失錯行為の場合と同じ仕方で解釈できるものであり、したがって他のより重大なかくされた心的経過のあるちょっとした表示であり、完全に心的行為であると主張することは、あるいはいいすぎのようにみえるかもしれない。しかし次のような事実の存在することもやはり認めないわけにはいかないであろう<sup>(30)</sup>。

(1) ある若い婦人が、まだ前の患者が入っているのに、とつぜん、治療室の戸をさっとあけ、「ついうっかりしていたものですから」と言って弁解した。しかしやがてそれが、彼女の常習行為であり子どもの頃両親の寝室に押し入ろうとした時と同じ好奇心のあらわれであることがわかった。

(2) 医者のところへ、鼻眼鏡、手袋、紙入れなどの携帯品をおき忘れる人たちは、そうすることによって、医者のところを離れるのが嫌で、すぐ又やってきたいと考えていることをそれとなく示しているのである。ある著名な精神科医が「精神分析医が患者の間でどれほどの信用を博しているかは、例えば、彼が一ヶ月の間に蒐めうる雨傘、ハンカチ、財布その他の数によってほぼ推定できる」とのべているのは、全く当をえた言葉である。

(3) ある人間が特に好んで用いる表現や比喩は、大抵の場合、その人間を評価する場合の重要な参考になったり、あるいは、目下のところ背景におしやられているが、実は話し手の心を強くとらえているテーマを暗示することが少なくない<sup>(31)</sup>。ある時ある人が、理論的会話の最中に、「突然何かが頭に閃めく schietzen ような場合には」という表現を何度もくりかえし使用して、相手に不思議な感じを与えたことがあった。ところで御当人は、最近息子がかぶっていた戦闘帽が、ロシアの砲弾によって前からうしろへと射抜 durchschietzen かれたという知らせをうけとっていたことが後で解ったのである。

(4) さっき帰ったばかりのミスKが、雨傘をおきわすれたからといって研究室にとってかえしてきた。彼がみると、なんと彼女はその忘れたはずの雨傘をちゃんと手に持っていた。彼は今、彼女にはこんな錯誤行為が多かったことを思いたしていた。彼女は長年勤めた研究室を、婚約成立のためにいまやめて辞していったばかりであった<sup>(32)</sup>。

以上の行為はみなわれわれに親近なできごとではあるが、その殆んどが重要なものでもあり、大概はその場かぎりで気にもとめられずにすぎさってしまうほんの一時的なもので、人間の生活に大した意義を持つものとはいいがたいであろう。したがってこれまでは多くの人々が事実それにたいした注意をはらわずに見過してきたものであった。しかしこれらのささいなできごとをすべてみな、われわれの日常生活における余計なかげり、なくもがなの気まぐれごととしてかたづけしてしまうことは、ある観点からすれば、はなはだ片手おちなことといわねばならぬ。思えばこれらの行為

は、誰彼の性格の特徴を表示しているものでもある。O氏やK嬢をふと思ひださせたり、他ならぬ恋人や彼女の魅力を構成している要素そのものであるばあいもあるのである。彼女の魅力を構成している何気ないあのしぐさも多くはきまってあのような時、このような時に表出されることが確定しており、それはそのような時、ある感情の上機嫌や不機嫌やいずれにしても何らかの感情の興奮がその背後にかくされているしるしであり、他のより重大な心的経過のあるちょっとした表示であるといえることができる。しかも彼女の魅力にとりつかれている彼にとっては、ある時点では他ならぬ全生活がそれによって回転しているともいえるのであって、いわば一喜一憂の原因であり、魅力の不可欠の要素なのである。しかしわれわれはそれは他人の個人的な家庭の事情であるからといって、不問に付し、無言の微笑をもって無関係を宣することこそが紳士のたしなみとされてきたのである。だが他人の家庭の事情であって、われわれに無関係なことだからといって、あっさりと放置しておいてよいものかどうか。

いずれにしてもこのような世に偶然行為とみなされがちな、無意味にみえるしぐさ、行為も、実は意味あるものであり、背後にかくされている意識されないが故に認知できない、無意識な心的過程のあるちょっとした表示であり、かくまわれていた心的過程が、思わぬ刺激にあつて思わず飛びだしたしるし、症候のようなものであるといえ、失錯行為、夢、更にはノイローゼの形成過程と似かよっているということに気がつくはずである。しかもわれわれはすべて、そのような他でもないささいなしるしや症候を唯一のめやすにし、これのみを道しるべに、人生の最も重要且つ微妙な場面をもきりぬけてきているともいえるのである。なんとすれば、われわれは恋人に「愛してくれますか」と卒直にたずね、「イエス」の解答をえたうえでもむろに次の行動にでていたわけではないのである。つまりわれわれは他人では殆んど気がつかないまなざしやちょっとした身のこなしや、握手の時間が今までよりも一秒長くなったことなどのささいなしるしから、婦人の愛のあかしをえ、次の勇敢な行動にでるきっかけをえてきたのであるから。時期を失すればすべて間のぬけた、いわば失われたロマンスという悲惨な結果になってしまうことを忘れてはならないのである。

ところで以上のべてきたような行為は、すべてみな人間の生活が始まったその時から存在しつづけたものであり、いまだにその存在を主張しつづけているものである。しかしフロイト以前の意識心理学では当然説明がつかず、したがってすべて人間の正常でない行為、病人のやることかさもなければ意味のない自然のいたずらとか偶然か生理的なできごととしてあつかわれ、時としては迷信の恰好な材料となっていたものである。とにかく人間の正常な生活には関係がない泡沫のようなものと考えたから、真面目にとりあげて研究する必要のないものとみなされ、うちすてられてきたものであった。その大きな理由は、なんといっても人間の心理を簡単に意識と同視したところからきていたといえる。すなわち意識にないもの、われわれに自明なこの意識と関連づけることのできないものは、われわれ正常人の心理とは関係のないものであり、したがって病人のせい、病人でない場合には心とは関係のない生理的なけいれんとか、自然のいたずらか偶然事とみなす他はなかったのである。そしてまじめにとりあげなくても、正常な人間の生活にはさほど支障をきたすものではなかったから、いってみればそれでもよかったのである。しかしその病人を直接に救済の対象と

する場合にはそれですまされないことになった。フロイトの精神分析学が、病人の救済を目的とする催眠療法の解明から、出発しているのもゆえなきことではなかったのである。

ともあれフロイトは、ノイローゼ症状が抑圧された無意識的な精神過程の作用によって形成されるものであり、しかもこの抑圧された無意識的な過程というものは病人に固有なものではなく、誰でもがかかわりをもち、その作用によって日常さまざまな影響をうけて生活しているのであり、われわれが夢とか失錯行為とか偶然行為と呼んでいるものは、みなこの無意識的な精神過程の影響によって生ずるものであることを解明したのである。ことここに至ってフロイトが、無意識の仮定は完全に正当であるばかりではなく、一つの必然であると主張するに至ったのも、けだし当然のなりゆきであったともいえよう。

## 8. 意識と無意識

ところで意識的とは、どんなことかということについては、われわれは何もいう必要はないであろう。もっとも直接的で確実なわれわれ自身の知覚を証拠としているのであり、他ならぬわれわれの知識はすべてこの意識に結びついており、知っているということは、すなわち意識しているということなのであるから。一方無意識的ということは、この自明な意識に対する言葉であって、簡単にいえばその結果（ノイローゼ症状、夢、失錯行為等）からみて、その存在を仮定せざるをえないが、しかしそれについては他ならぬわれわれ自身が何も知らない精神過程のことである。したがってこれを知るには、ノイローゼや夢、失錯行為でしたように、解釈する、つまり意識に翻訳することがどうしても必要になってくるのであって、そうすることによってしか、われわれはそれについて知ることはできないのである。

しかし考えてみると無意識的なものを意識におきかえる、翻訳するなどといっても、それ程大それた望みをわれわれが抱いたということにはならないのである。なぜならばわれわれは既に長い間他ならぬこの翻訳を何の苦もなくやり続けてきたのであり、それどころかわれわれの社会生活はまさにこの事実の故に成立しえてきたのであり、恐らくはこれなしには一日たりとも成立しえなかったであろうからである。というのは、意識はわれわれにただ自分の精神生活しか伝ええないのであり、他人の精神生活を伝えるはずもなく、他人の精神生活はすべてわれわれにとってはいわば無意識的なものであるはずなのである。なのにわれわれは知覚できる他人の表現、動作などをもとにして他人にもわれわれと同じ精神生活があると仮定し、彼らの精神生活を類推する、つまり翻訳することによって、他人をば理解してきたのであり、社会生活はまさにこれ故に成立しえてきたといえるのである。そればかりかわれわれの先祖はこの類推をわれわれの同胞である人間ばかりではなく、動物、植物、無生物ひいては全世界にひろげていたのであり、それで支障がない間は何らあやしむことなく見過してきたのである。今日なおこの誤謬の残滓は、小児のアニミズムとして広く知られている精神状態の中に残っており、それは他ならぬわれわれの発達過程を通じて訂正される他はないのである。したがって今日なお最後のとりでの如く残っているわれわれ同胞についても、この意識の仮定はあくまでも仮定なのであって、それ程確実なものとはいいいがたいともいえるのである。

ともあれわれわれは他人の精神生活を、外面にあらわれる知覚できる彼の作用や表現をたよりに、われわれの精神生活と同一視することによって理解しているにすぎないことを知る。(しかも他人の場合には、自分自身の場合には容易に認めないようなことまでも、よく感づき、遠慮なくその人の精神生活の一駒としてとりいれていることをわれわれはよく知っている。)となればわれわれがわれわれについて認め、しかもわれわれの精神生活に関係づけられないでいる作用や表現に対するわれわれの関係は、他人の作用や表現に対するわれわれの関係と全く同じ関係にあるといわねばならぬ。したがってこの場合、当然他人の表現、作用のように、われわれの精神生活と関係づけられて然るべきなのに、何故か関係づけられないでいるにすぎないことを知る。つまりことがわれわれ自身のことになると、特殊な妨害にあって、われわれの得意とするこの推論はきかなくなるのだといわねばならぬ。その大きな理由は、恐らくは他人の精神生活に対する場合とはちがって、われわれ自身の場合には、自分のよく知っている意識生活とよく知らない精神生活が一体となっている、つまり、互に働きあった末に、一部が表面に浮びあがって意識され、他方は意識されてはならぬために、無意識の世界におしこめられるからだといえよう。したがってこれを意識化するためには、それを無意識の世界におしこめ、今もなおおしこめつつけているある種の力を止揚することがどうしても必要になってくるのであって、まさにそれこそが精神分析が請負うことになった仕事の重要な部分を占めるものなのである。そして精神分析では、この意識化される以前におかれた状態を抑圧されたと名づけたのであり、抑圧をひきおこし、それを今なお支持しつづけてきた力を、精神分析の仕事をしている間中、その仕事に対する抵抗として感ずると主張したのである。このように精神分析では無意識の概念を抑圧説からえたのであり、抑圧されたものは無意識の原型であるということができる。

ところでわれわれの経験を吟味してみる時、次のような事実のあることをわれわれは知っている。心理的要素、たとえば表象は通常持続的には意識されず、意識している状態はむしろすみやかにすぎさっていき、ある瞬間意識されていた表象は、次の瞬間にはもはや存在しない。しかしそれはまた容易につくられるある条件のもとにあっては、ふたたび意識されうる。したがってその間も表象は確かに存在していたのであろうが、それが何であり何処にしまいこまれていたかについてはわれわれは何も知らない。ただわれわれはそれが潜在していたのだということができ、そのさいそれが何時でも意識的となりうる性質のものであると考える。つまりそれは意識されるまでは無意識的であったということになるが、この場合無意識的ということは、潜在的であって、しかもある条件さえ加われれば容易に意識されうるということと一致している。

以上のように無意識的であるということでは一致していても、考えてみればさまざまな威力をもった心理作用がある。たとえばわれわれのみてきた健康者の失錯行為や夢ばかりではなく、神経症患者のいわゆる症状とか強迫現象といわれているものは、すべてみなこの無意識的なものの作用であった。そしてこの他われわれの日頃の個人的経験にも、由来の解らない思いつきというものがあるし、ある朝めざめた時突然解決の糸口がみつかったというような、それまでの操作のいきさつがかくれている思考の成果といったものがある。これらの事実は、われわれが精神作用というも

のが、すべて意識を通じてしか経験される以外にはないという意識心理学の立場を固執するかぎり、みな関連のつかない、不可解なできごとになってしまう他はないのである。ところがわれわれの主張にしたがって無意識の過程をそこに挿入すれば、これらのできごととはちどころにすべて因果関係をもった、正当な意味ある現象としてとらえられるようになるのである。つまりわれわれが意識を通じて経験しているところのものは、多くの間隙があるからわれわれの精神生活のごく一部にすぎないこと、むしろわれわれの精神生活の本筋は無意識の方にあるのであって、それを意識したり意識しなかったりすることによって、われわれの精神生活がなりたっているということである。つまり、われわれの知覚にはあくまでも主観的制約があるのであり、われわれが感覚器官によって知覚する外界の事物がすなわち物自体であると錯覚してはならぬとカントが警告したように、われわれの意識による精神過程の知覚にも主観的制約のあることを忘れてはならない。すなわち、「心理的なものも、物理的なものと同じように、現実にはわれわれに見えるようなものである必要はない<sup>(33)</sup>」のであって、われわれが意識によって知覚する精神過程は、われわれの精神過程そのものではありえないのであり、いわんやそのすべてなどではなおさらありえないということである。まずこの点をしっかりと認識してかからなければ、人間の心の正当な理解に近づくことなどは到底できない相談であると、フロイトは主張するのである。（未完）

#### 参 考 文 献

この小論文作製にあたって、主として使用した参考文献は次のものである。

フロイト選集（日本教文社版）

第1巻 精神分析入門（上）（丸井清泰訳）—原書名—Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse.

第2巻 同 （下）（ “ ）— “ — “ “

第3巻 続精神分析入門（古沢平作訳）—原書名—Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse.

第4巻 自我論（井村恒郎訳）—原書名—Jenseits des Lustprinzips; Massenpsychologie und Ich-Analyse; Das Unbewusste; Das Ich und das Es.

第5巻 性欲論（懸田克躬訳）—原書名—Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie.

第11巻 夢判断（上）（高橋義孝訳）—原書名—Gesammelte Werke.

第12巻 同 （下）

第13巻 生活心理の錯誤（浜川祥枝）—原書名—Zur Psychopathologie. des Alltagslebens.

第17巻 自らを語る（懸田克躬訳）—原書名—Selbstdarstellung.

#### 注

（1） むろんフロイトの無意識心理学を真向から否定し、したがってこれに真正面から対立する学説は、人間の心理をあくまでも高次神経活動の忠実な反映としてのみとらえるべきであるとする、パヴロフ（I. P. Pavlov）一派の学説であろう。彼らからみればフロイトの著書は、ある現象にもとづいて空想を思うままに働かせた文学作品ということにでもなるだろう。

（2） もっともレヴィンは、フロイトの功績は認めている。たとえば次のようにいっている。「フロイトの学説の最も大きな貢献の一つはひろく正常者と異常者との、また、日常性と非日常性との境界を消し、さして、その際に心理学の全領域の等質化を促進したことである。」「パーソナリティの力学説」

（3） フロイト著「自らを語る」（懸田克躬訳）—フロイト選集17 日本教文社版— p. 18.

- (4) たとえば同 p. 24 及び同 p. 215 (あとがきにかえて) など。
- (5) 同 p. 26.
- (6) 同 p. 34.
- (7) 同 p. 24.
- (8) 同 p. 34.
- (9) 同 p. 35.
- (10) 同 p. 35.
- (11) たとえばフロイトノート No. 16 (日本教文社) 吉田正巳著「露骨な学問のひかえめな創始者の一面」など。またこれと関連してフロイトがきつと好色家であったにちがいないとする論もある。(たとえば同ノート No. 6 高橋義孝著「印象—フロイトの英雄主義の秘密」など。
- (12) フロイト著「自らを語る」(上掲) p. 52.
- (13) 同 p. 36.
- (14) 同 p. 38.
- (15) フロイト著「精神分析入門(下)」(丸井清泰訳)—フロイト選集2— p. 66.
- (16) フロイト著「トーテムとタブー」(土井正徳訳)—フロイト選集6—
- (17) フロイト著「精神分析入門(上)」(丸井清泰訳)—フロイト選集1— p. 34.
- (18) フロイト著「自らを語る」(上掲) p. 34.
- (19) 同 p. 58.
- (20) フロイト著「精神分析入門(上)」(上掲) p. 166.
- (21) フロイト著「夢判断(上)」(高橋義孝)—フロイト選集11— p. 147.
- (22) 同 p. 144, p. 146.
- (23) フロイト著「自らを語る」(上掲) p. 59.
- (24) フロイト著「夢判断(上)」(上掲) p. 32.
- (25) 同 p. 34.
- (26) フロイト著「精神分析入門(上)」(上掲) p. 158.
- (27) 同 p. 30.
- (28) 同 p. 59.
- (29) 同 p. 62.
- (30) フロイト著「生活心理の錯誤」(浜川祥枝訳)—フロイト選集13— p. 288.
- (31) 同 p. 290.
- (32) 同 p. 356.
- (33) フロイト著「自我論」(井村恒郎訳)—フロイト選集4— p. 200.

## On Freudism — Part one —

Hiromu Kishimoto

It is only natural for Freud to have become noted in history with advocacy of unconsciousness and sexual love of infancy.

In the academic world before Freud they had regarded mental state of mankind in the same light with his consciousness, that is, man's mind was just man's consciousness and it had been beyond imagination that there was mental life of man which he himself didn't become aware of. And they said such suggestion as infancy had sexual desire would bring disgrace upon man's genuineness and man should not begin to struggle with sexual

desire until his puberty. But making clear the mechanism of neurotic development, Freud found out that man got ill from what he was not conscious of and he made out that unconsciousness, which was the cause of a disease, could usually be traced to the remnants of suppressed sexual impulse of infancy. Freud also applicated this mechanism to “dream” and “mistake” of a man of health and succeeded in elucidating that the both were built up through the same process. By this Freud could prove that unconsciousness is not characteristic of a sick person but has relations with a man of health. Not only that it become clear that the essence of psychology is rather in unconsciousness than consciousness. Consequently it was proved that his new theory so much jeopardized the basis of the preoccupied ideas. That would be why he had to spend his life surrounded by foes on all sides, as he had said, having tried in vain to revolt against authority. In this thesis I tried to elucidate the unique point of Freud as mentioned above, and this is the part 1.